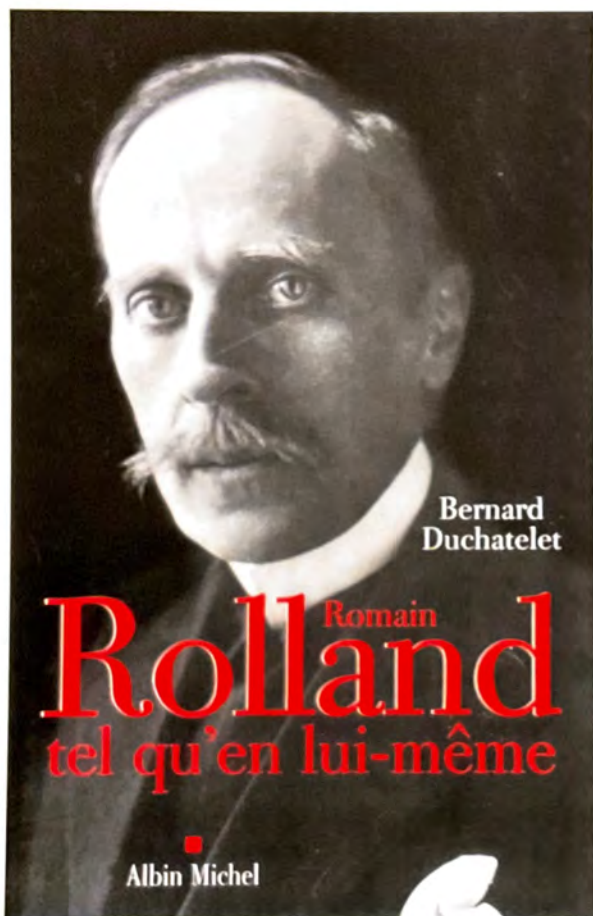


ユニテ 30



財団法人 ロマン・ロラン研究所

2003. 4

目次

ロマン・ロランへの新たな見方	ベルナール・デュシャトレ	1
訳・村永京介		
はじめての翻訳をして		26
ベルナール・デュシャトレ		
『あるがままのロマン・ロラン』概要	村上光彦	27
ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から	村上光彦	49
4		
村永京介		
〈没後二十年宮本正清を偲ぶ①〉		
ロマン・ロラン随想	宮本正清	56
〈没後二十年宮本正清を偲ぶ②〉		
四国の山間の小学校から	編集部	62

〈没後二十年宮本正清を偲ぶ③〉

追悼朗読会に参加して 能田 由紀子 64

ロマン・ロランの後継者たち 蜷川 讓 67

パリから——「ロマン・ロランの友の会」の人たちと 宮本 エイ子 75

読書会報告 有馬 通志子 81

ロマン・ロラン研究所ホームページ改訂について 清原 章夫 82

『本は生まれる。そして、それから』 小尾俊人著 濱田 陽 84

追 悼 86

ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書 87

二〇〇二年度 賛助会員、寄付者名簿 92

あとがき 93

ロマン・ロランへの新たな見方

ベルナール・デュシャトレ

訳・村永京介

「遺言通知書」の中で、ロランは次のように述べています。

「それを望む人なら誰でも、その人なりのやり方で、私について書いたり判断したりする権利を当然持っている。しかし私は、それら全ての人に対して、それもとりわけ私の友人を自認する人々に対して、私自身の名において語るいかなる権利も認めない。いかなる人にも私に代わって語る権利はない。その資格を持つのは私のみである。そして私というのは、私の書いた書物（私の全ての書物）や日記であり、私のあらゆる日記帳を意味する。」彼はさらにこう付け加えることもできたでしょう。「そして、私のあらゆる書簡である」

すでに多くの書簡が出版されてはいるものの、様々な理由によって、いまだ刊行されていないものも少なくありません。とはいえ、すでに知られているものうちの大部分は、かなり以前から、自由に参照することが可能になっています。ですが「日記」となると話は別です。マリー・ロランは、「日記」が「ダイナマイト」を抱えているとまで言っているのです。しかし彼女は、二〇〇〇年になるまではその内容を公開しようとはしませんでした。そして今や時は来たのです。実際、この「日記」は、ロランの人となりや作品についての多くの誤った見方や判断を修正するよ

う迫ってくる沢山の記述、それもしばしば爆弾めいた記述を含んでいます。「日記」を読むと、書簡を読むのと同様に、私たちがあまりにも頻繁に作り上げている、ロランについての誤ったイメージが一新されます。私たちは、ロランという人間を、彼の真実や複雑さの中で、彼の偉大さや脆弱さ、失敗や後悔とともに、あるがままに見ることができるとは思います。

思い切ってこう言ってみましょう。ロランは、ついにその正体を現した、と。正体が暴かれるということはつまり、仮面が取り除かれるということであり、本来のロランがその裏側に隠れ込んでいた最後の仮面が外されるということであり、他の人々が彼に押し付けてきた諸々の仮面が外されるということなのです。

一九二六年（当時彼は六十歳だった）、ロランは自分の肖像画の作成を検討しながら、こう明確に述べています。「実際の（あるいは一般的な）外観の肖像、真実のそれと後天的なそれ（仮面）」（VI, 332）。「仮面」という語はまさにロランの用語ですが、ついでながらそこからは、あの「私自身を守るための本能的で不可欠な規律である極端な堅苦しさ」（VI, 334）が、とくに顕著に連想されます。

事実この人物は様々な顔の持ち主でしたが、しばしば自らを隠し、さらには仮面の裏側に逃げ込んだりしたのです。ここで私は二つの証言を引用するにとどめたいと思います。まずはアランの証言です。一九三六年に、彼はこの「礼儀正しく控えめな」人物と初めて何度か出会った時期のことを回想しています。それは前世紀の始まりの頃でした。一九〇八年、この哲学者は、ロランとともにバカロレアの審査に加わりました。そして彼は、ソルボンヌ通りの高等社会学院でロランと出会ったのです。アランはロランの印象を次のように記しています。「私には、彼の大股な歩き

方や近付き難い顔つき、そして礼儀正しい微笑を、じっくり観察するだけの時間があつた。私はかくも見事に仕上がつた彼の存在の中に無遠慮に踏み込んで、彼を困惑させてしまつた。さらに私は、度を越した賛辞によって彼の平穩を乱した。というのも、彼は人を寄せ付けないような遠慮深さを示したからである。²もうひとつの証言は、彼にインタビューをしたポーランドの女性のものです。「不可解なまでに内気で、神経質なところを抑えきれず、鎧や仮面として機能する大袈裟な礼儀正しさを見せた。彼は質問を好まず、好奇心を好まず、自分について語ることを好まない。質問が気に入らないと、彼は奇妙な仕方で返答を避けた——つまり、話し相手の目をまっすぐに見つめ、気取つた笑みで執拗に微笑み続けるのである。」

ロランは、自分がなぜこの防御用の仮面を作り上げたのかを説明しています。誇りの高さから他人に反発して、「私の思想世界を妨害するように思われた他者の思想世界に対抗して、苛立ってきた」(M, 249) からだというのです。彼はその時、ジャン・クリストフを創り出すことによって、自分の世界に閉じこもってしまいました。一九〇四年の四月、友人であるソフィア・ベルトリニに対して、ロランは次のように告白しています。「私は、自分がどのような人間なのか、自分自身に対してすら容易に示すことができないほど錯綜しています。他の人々が私を理解できるはずありません。」(CII, 169) また母親に対しては、すでに一八九〇年に、ファルネーゼ宮の仲間との関係について告白しています。「私は自分の手の内を隠し、状況に適応することができます。」

これがロランの第一番目の仮面です。その上に、他人から彼に無頓着に押し付けられた仮面が、他にも色々ありました。

まず一九一四年に「戦いを超えて」が彼にもたらした仮面があります。ロランは祖国の裏切り者に仕立て上げられ、したがって彼の文学作品は何の役にも立たないことにされてしまいました。人々は彼の作品を読むのを拒んだのです。一九二〇年に出たロランの「クレランポー」は、ほとんど何の反響も呼び起こしませんでした。「万人に抗する一人」であろうと望んだ人間の個人主義など、どうしようもないではないか？ というわけです。なるほどロランの友人たちは、ロラン本人の助力を得つつ、ロランを世に出そうと企てました。大戦直前の一九一三年にでたポール・セツペルの本以降、フランスでは、一九二〇年のピエール・ジャン・ジュエヴの諸作品、一九二一年のマルセル・マルティネやジャン・ポヌロの作品が現れたし、外国でも、一九二〇年のシュテファン・ツヴァイクのものや、一九二一年のポール・コリンの作品が出ました。それらは皆、ロランに対して好意的で、共感に満ちたものでした。しかし、ロランが一九一七年に始まるロシア革命に挨拶を送ってからというもの、人々がロランについて何らかのイメージを抱いたにしても、その影像是、一九一九年の「精神の独立」に向けた戦いや、一九二一―一九二二年のバルビュスとの論争にも関わらず、彼のイデオロギー上の戦いへのアンガージュマンによって、早くも掻き乱されてしまったのです。さらに、フランス共産党が、当事者の暗黙の了解や脆弱さにつけこんで（これは事実です）、自分達の都合の良いように利用するべく彼に付与したイメージも存在しました。おそらくここで、ロジェ・マルタン・デュ・ガールが、一九三六年の十一月、「道づれたち」が騒々しく祝福されていたまさにその時、ロランに書いたことを思い出さねばならないでしょう。「異論の余地のない勝利の時がやって来ました。それを私以上に愉快に喜んでるものはいないでしょう！ しかし、私があなたのなかで好きなのところは、今日人々が革命の大盾のせて歩き回っているものとは別の、さらにずっと大切なものであるように、私には思われるのです……」

事実、ロランはまさしく「それとは別の、さらにずっと大切なもの」でした。彼がそのなかに閉ざされ幽閉されて

いたイデオロギーの外皮を破り、そこから彼を引き出すべきときが来しました。確かに、ロランのアンガージュマンを否定してはなりません。彼はそれを自ら、とりわけ一九三一年以降、高らかにまた強固に宣言していたのです。しかし私たちは、彼をよりよく理解するように試み、必要以上の単純化に陥らないようにすべきでしょう。特に、ロランのフランス共産党に対する態度やソ連擁護が問題となるような場合は、注意が必要です。「日記」や様々な未刊の書簡は、彼のとった立場のいくらかを、より細かく理解するために役立ちます。今や私たちは、当時の共産党にとって言わずにおくのが得策だったことさえ知ることができるのです。ああ！「ユマニテ」紙が公にした手紙だけでなく、例えばロランからモーリス・トレーズへ宛てた手紙等を、全部読むことができたらありがたいのに！ロランと彼を利用しようとする人々の間の駆け引きは、フランス共産党の側でも、コミンテルンの側でも、時として実に微妙なものでした。それどころかロランは、自分の考えを通すことにいつも成功していたわけではなく、道具として利用されるがままになることもありました。だからといって、彼は、その外見とは裏腹に、ある人々がいつもそう信じていたような、偉大な素朴者であったわけでもありません。

彼のケースは興味深いです。都市における思想家の役割とは何でしょうか？いかなる条件の下で、彼は政治に関わりあうことができる——関わりあわねばならない——のでしょうか？ロランは、闘いに参加しました。彼は、自分は何らかの義務に後押しされるようにしてそうした、と考えています。一九二四年、彼は次のように記しています。「私は、黙っていることはできませんでした。しかし、私はどれほど黙っていたか！それは私の役目なのだろうか、神の炎と、神の衣である《世界》についての観想に生きる、永遠の孤独者である私の。政治というおぞましいハチの巣に入ることが、私の役目なのだろうか？」彼は続けます。「そうしなければならなかった。私は語った。まるでそれは、人類を導く抗し難い《力》が、私に語りかけたかのようにだった。「他の人々は死んだ。立ち上が

れ！ お前は命令を届けなければならぬ』(VI, 269~70)

これが彼の「戦いを超えた」行動の意味だったのであり、そして、彼のヨーロッパの和解を目指す弁論の意味だったので。あの「力」から受け取った命令に従って、ロランは、偉大な原理、すなわちいかなる政治的党派にも組まない人類愛の名の下に語りました。次いで、彼の同時代の社会秩序に対する反抗と、闘争へのアンガージュマンは、人間性への同じ信念、人類に纏わり付いて離れない大いなる苦しみ、そしてそれを癒すことへの配慮の中に、その源泉を持っています。イタリアのファシズムやナチズム、そしてこの両者が後に引き連れてきたあらゆる「イズム」の怪物に対する戦いは、そのようなものでした。「人種差別」や「反ユダヤ主義」といったイズムです。ロランは、社会革命の必要性和高貴な価値への愛着を調和させたいと願っていました。彼が、一度そうすることを拒んだ後で、ソ連とその革命に対して決然と味方することを受け容れたのは、それは自分がソ連とその革命の思慮に富む助言者でありうると考えたからです。彼がそう言ったように、「『野蛮人たち』のもとで」(GAG, XXXIII) 過ごしながら、彼は革命の陣営の中に自由の旗印を持ち込むことを望んでいました。一九三五年に彼がモスクワを訪れたとき、彼は穏健派のブハーリンが勝利すると信じていました。当時彼は、レーニンとガンジーそして、そのそれぞれの後継者を和解させる夢を追っていたのです。

ロランは自分が自由であると思っていました、というのも彼はどの党派にも属していなかったからです。しかし、彼は政治的闘争に巻き込まれ、党派人として振る舞いました。ロランとその時の彼の否認を弁護するつもりはないですが——「〈精神〉の独立宣言」の執筆者は、次のように宣言したではありませんか。「〈精神〉は自らの列中に戻らなければならない！」——しかしながら、彼の道づれとしての態度については細かい事まで注意を払う必要がありま

す。「日記」を読むと、私たちはロランの疑問と疑念を見出すことができます。それも、早くも一九三六年からです。共産党が彼に担わせようとしていた役目に、ロランが容易に同意していなかったことが分かるのです。彼はいくつかの命令を拒んでいます。一九三七年末から一九三八年の初めにかけて、スターリンに関して、どうすればよいか分かっていました。一九三七年の十二月、そこから救済が来ることを希望しつつ、彼はソ連にまだ忠実であり続けましたが、もはやクレムリンの支配者を弁護しはしないのです。個人的には、彼はフランス共産党との不和を徐々に示しています。これが断絶の始まりです。私たちは、ロランに対して、他の多くの人々が彼とともに犯した過ちを、責め立て過ぎることのないようにしましょう。当時は、彼は付き合ってはいけない人物ではなかったのです！ アンドレ・ジッドは、自身のアンガージュマンの中で彼と仲間になったし、若きアンドレ・マルローは、おそらく彼以上に、「スタリニアン」であり、「スタリニスト」でした。

彼の同時代人たちにとっては、ロランの変貌ぶりについていくことは容易なことではありませんでした。彼の絶え間ない変化は、一人ならざる人を狼狽させるものでした。当のロラン自身も、一九四三年、日記の中で次のように認めざるを得ませんでした。「私の立場は、多くの単純な人々にとっては、特異で、逆説的で、不可解である。「対独協力派」に変わった「完全平和主義者」にとっては、私はスターリン主義者であり、反ドイツ主義者である。熱心な反ドイツ派にとっては、私は親独派である、なぜなら私は自宅に多くのドイツ人を迎え入れているからである。第一次世界大戦を覚えているブルジョワにとって、私がなお平和主義者であり、ガンジー主義者であり、祖国の無い者であるということに疑われないようにしよう。自分がどのような人間なのか、見当をつけたまえ。」(Bio, 364) 単純な人々？ それだけではありません！ 彼が、それ以前に弁護していたものとはまるで反対の立場をとるように見える、あるいは実際にそうであるのを目撃して、少なからざる人が彼から離れていきました。それも、取るに足らない連中

ばかりではありませんでした。ロランは矛盾など気にもとめていなかったのです！多くの友人達の中でも、マルセル・マルティネ、そしてジャン・ゲノーは、ロランにそれを指摘しました。またアンリ・ギルポーは正当にも、ロランがその舞台の上ですまじ歩くのを受け容れた共産主義の「広場の市」を非難しました。両立不可能なものを両立させようと望んだ以上、彼はどうやって誤解と無理解を避けられえたのでしょうか？

ロランは生涯を通してこれらの無理解に苦しみました。彼は極めて早くから、「自分と戦友たち（反戦の友人たち）との間に本当の親近性が存在しないこと」（VI, 274-5）を確認しています。一九二五年、彼が道づれとして決然と参与するまさに直前、彼はこう記しています。「私の思想は、意図的にせよそうでないにせよ、絶えず誤解の対象となってきた。それはしばしば私の書いたものについての、無知によって引き起こされてきた。そして、事実を歪曲する先入観が、この無知と結びついたのである」（VI, 327）。「私の文学仲間でも最も親密な者達でさえ、私の作品の九割も読んでいないのだった。そのくせに、彼らは私の作品を賞賛していたのである。」（VI, 328）彼の主導権のもとに創刊された『ウーロップ』誌について、一九二五年の十二月十七日、ロランはシュテファン・ツヴァイクにこう告白しています。「確かに、私たち『ウーロップ』の仲間達は奇妙な連中です。彼らは私の中に政治的な旗印（もっとも、それは私のものではないのですが）しか見ないのです。私の『文学』は、いかなる形においても、彼らの関心を引きつけないのです」（Bio, 267）。すでに、彼は懐柔されていたのです。その後、一九二九年に、彼は『日記』の中でさらにこう述べています。「インドについての私の本は『ウーロップ』誌の『私の友達』（極めて少ない！）にも同様に理解されていない。彼らにとって、それは死んだ文字なのだ。私の『ペートーヴェンの生涯』と同じだ。」彼は付け加えます。「時がたてば、私が自分の思想にこれほど完全に無理解な集団の中で生き、活動し得たということが、驚きの的になるだろう。」（Bio, 293）。「根本的に、彼らは私が書くものが好きではないのです。（彼らは私を個人的に

評価する)彼らは私の名前を利用する。それだけです」と彼はすでにその数ヶ月前に告白しているのです。彼らに理解できるはずがありませんでした。ロランは、自分自身が、人々が彼から作り上げたり彼に与えたがったりするようなイメージとは別の何者かであることを知っていたのです。彼が真にそうであるところのものを、誰が知っていたのでしょうか? 「私は誰のために書いているのでしょうか?」——一九三二年六月六日、ツヴァイクに宛てた手紙の中で彼は自問しています——「これらの哀れなフランス人達のため——そのうちの最もましな人々でさえ——」
「……彼らが私を好むときでさえ、私をこんなにも誤解するフランス人達のため?」

ロランは絶えずこの無理解というテーマに立ち戻ります。しかし彼自身にもその責任の一端があるのではないのでしょうか? 一九四一年の九月、『日記』のなかで、彼は次のような苦い確認をしています。「自分が書き上げ、そしてその意味が決して理解されず、情動によって常に歪曲されてしまうようなものの無意味さに、何と云んざりすることか、」
「……敵も友人も、自分を歪曲してしまう。私を憎む者達は、私の中の平和主義者を、主戦論者を、ガンジー主義者を、ボルシェヴィキを、かわるがわる、そして総体的に、矛盾を気にすることなく憎悪する。またそれは友人達でも同じことだ。誰でもが私の中に自分の見つけたものを見いだす」

『日記』と書簡は、ロランを少しでもあるがままに見ることを可能にし、彼をその複雑さ、そして矛盾において、提示することを可能にします。その際、彼の苦悩に満ちた闘争を無視しないかぎり、彼の複雑さや矛盾を説明し、ひとつの統一体に導くよう試みるのが可能になるのです。彼が背負い込まされているあらゆる肩を取り除く時が来ました。ここでとりわけ大切なのは、彼の通った軌跡をその果てまでたどることを受け入れることです。政治的アンガージュマンがこの作家の相貌に持続的な影響を与えてしまっています。しかし、どうして彼をその生涯の中のごく

一時期の姿だけに還元したり、ある一つの時期の中に閉じこめたりするのでしょうか？ 一九一七年に彼が書いたことを忘れないようにしましょう。「私たちは、ある人生を進行中の状態で判断することはできません。なぜなら私たちは、人生がこれからの十字路ごとにどの道を選ぶのかを知ることができないからです。」ロランの人生は一九三六年から一九三八年の間だけで終わっているわけではないのです。それが終わるのは一九四四年のことです。私たちは、彼がヴェズレーにいた時期のことを、十分に考慮しなければなりません。この時期は、ロランという人間とその作品に再び本来の輝きを与え、それらを固有の真実においてはっきりと現出させるのです。ヴェズレーにおいて、ロランは、自分自身の、そして他の仮面を外すのです。

ロランとその作品に新しい見方を設定する前に、私は、ロラン自身がその人生の終わりで『日記』に記した以下の言葉を心に留めておきたいと思います。「私は変わったのだ！ などは誰にも言わせない。——本当は、誰も私を書いたものなど読まなかったのだ、——誰もお前の書いたものを読まない、——敵も味方も！ 彼らはお前について、お前の名前とお前の『伝説』しか知らない、その伝説も、彼らが自分達の論争の必要に応じてでたらめに発明したものなのだ。その必要に応じて、『伝説』は姿を変える、ある伝説が次の伝説に続いていく。誰が真実を気にかけるのか？ 「…」私は今のうちから、私が死んだ後で、私についてでっちあげられるものを想像するのだ！」

私は、別の新たな伝説を作り上げたくはない。そうではなく、よりいっそう真実に接近したいのです。

ヴェズレーの時期を通じて書かれたロランの『日記』と、その頃書かれた手紙は、特別な注意に値します。とりわけ、彼が自分の妹に宛てた手紙がそうです。一九四二年三月二日に彼が以下の告白するのは、他でもなく彼女に対し

てなのです。「ああ！ 一九一四年以降、仲間を変えたことで、得ることはなかった。その後でやってきた仲間達は、芸術的に、そしてとりわけ私の真の本性についての理解の点で、何と劣っていたことか！」その二カ月前に、彼はアルフォンス・ド・シャトーブリアンに、彼らの「真の使命」が、「精神によって精神に奉仕するべく印づけられた精神の人間達」である彼らの使命が、どんなものなのかを思い起こさせていました。シャトーブリアンについて、その時ロランは悲しみながら書いています。「ああ！ 彼は自分の真の本性を裏切ってしまった！ その本性を下劣な政治に引き渡すことによって。彼は自分の芸術的至宝を汚いレンズ豆の料理のために売り払ってしまったのだ！」なぜ「真の本性」に、彼のそれは固執するのでしょうか、彼の友人の「真の本性」に？ なぜ彼らの「真の使命」を思い起こすのでしょうか？

独ソ条約以来、ロランは、自分がどんな不幸な過ちに陥っていたのかを、決定的に理解しました。一九四〇年の劇的事件で、彼はそれについてさらに反省することになりました。この誇り高い人物は、自らの愚かな頑固さを悟ったのです。もし彼がそれについて公的な告白をしなかったとしても、その時彼が「内面の旅路」に付け加えたページの中で、それについて言外の意味をほめかすような言い方で語っています。「私は自分の機織りに謙虚さの精神を取り込む。私はもはや自分を正当化しようとは思わない。」確かに、彼の話の中には、ある種のブラックホールがあるいはブランクが——残されています！ ロランは進んでファシズムに対する戦いや戦争に反対するアンガージュマンについて語り、自分の行為を説明します。「私は、資本主義的で軍事的な帝国主義に対する戦いを、国際的な平和を守ることから決して分離したりしないだろう。」彼は圧制に対する自らの戦いを、すなわち「資本主義的で帝国主義的な古い世界、またそれを強固にするようなファシズムに対抗して、人間性を守ること」を強調します。「私は新しい秩序を築く意志を宣言した。その秩序の中では、最後には、階級も国境もない人類共同体の、平和的で理性的

な協力が成立するのだ。」しかし彼はスターリンの道づれとしての、またソ連の弁護者としてのあからさまなアンガージュマンについては何も語りません。彼は自らの理想的な夢を喚起し、悟ったようにただこう確認するのです、「計算はずれであった……」(VI, 294)。

しかし彼の『日記』やいくつかの書簡の中には明確な告白があるのです。一九三六年の七月に始まる手帳の表紙に、彼は、一九四〇年に、この「バランスを失った時代」に自分が記録したことをどれひとつとして抹消したくない、と記し、以下のように述べています。「私は時代の混乱と過ちに参加した。私は今ではそれをよく認識し、後悔することができぬ。私にはそれを抹消する権利はない。」(Bio, 362)。同じ一九四〇年の六月には、彼は、自分が友人のシャトーブリアンが政治を断念するように仕向けたと考えています。『日記』の中で彼はひとつの考察を付け加えています。彼の筆で記されると、なかなか辛口の考察になります。「ああ！ 物書きはなんと無能なのだろう」「……」自らの仕事の外に打って出るときには！ 彼らには政治を禁じなければならぬ。また彼は、余談として、明快な皮肉を込めてこう感嘆しています。「そしてそれを要求しているのはまさにこの私なのだ！」彼はそれについて弁解していません。「そう、私はこの介入の危険性を全て目の当たりにしたのだから。」「……」そして私は自分の犯した過ちの全てを悟った。私はシャトーブリアンが彼の過ちを悟るかどうかは知らない。しかし、彼はもはや芸術や宗教的瞑想などの領域の外には出たくないと思っている。彼をそのままにしておこう！」何と不幸で敬虔な誓いでしよう！ 一九四〇年十二月、ロランは友人と再び会います。そして彼と政治について議論し、ロランは、彼が「仕事が好きになったように見える」ことに気づくのです。そしてこのように付け加えます。「私はというと、私は政治と縁を切った、と言った」このことはしっかりと記憶にとどめねばならないでしょう。

またそこから結論を引き出さねばなりません。ロラン自身が非を認めた、彼自身の政治的アンガージュマンの悲劇的失敗を、絶えずロランに突き付けても仕方ないではないでしょうか？ 確かに、彼がそれを公的に認識しなかったという点で、常に彼を非難してよいのは当然です。しかし、ひとつの哲学的で文学的な作品の読解が、作者の政治的・一時的なオビニオンや彼が犯した自分の過ちをどの程度告白するかという点に依じてしかなされないものなのでしょうか？ ハイデッガーのナチスへの参与が一時的にどんなものだったにせよ、それが彼の哲学を傷つけるのでしょうか？ 誰一人として非難することのない彼らの立場のとり方にも関わらず、ブラジャックやセリーヌやドリュエ・ラ・ロシュエルが、アラゴンやエリュアールやマルローらと隣り合った位置にいるということを妨げるものは何もないのです！ 『人間の条件』や『希望』を読む一方で、なぜロランと『魅せられたる魂』を拒絶するのでしょうか。それらが書かれたとき、作者はロランよりもっと共産主義的だったとは言わないまでも、少なくともロランと同じくらい共産主義寄りだったのです！ マルローはアムステルダム運動に参加しました。その時期、彼はソ連に同調していました。一九三四年、彼はモスクワに行き、アラゴンとともにソ連の作家会議に出席しました。彼はその時のロランと同様に、「自由の国」ソ連を弁護するつもりであることを宣言しました。一九三四年から一九三七年にかけて、マルローはフランス共産党との関係のピークにあったのです。彼もまた道づれでした、そしてロランは一九三四年の十二月に書かれた「バノラマ」の中に彼を喜んで引用しました。この「バノラマ」は、彼の『闘争の十五年』(GAC, XXXX)の冒頭に置かれたのです。次いで、マルローはスペインにおけるスターリン主義の犯罪について口をつぐみ、ロランがクレムリンの独裁についてそうしたのと同様、沈黙を守りました。一九三七年の二月、マルローは、「異端審問がキリスト教の根本的な威厳を損なわなかったのと同様、モスクワ裁判は共産主義の根本的威厳を減じさせはしなかった」と宣言しさえしなかったでしょうか？

したがって、一度だけでも、私たちが他の作家たちに対してそうしたように、ロランの政治的意見をわきに退けて考えてみましょう。彼の作品があるがままに読んでみましょう、そしてロランを彼の「真の本性」において見つめてみましょう！ 彼にこう尋ねてみましょう——これこそまさに本質的な問いではないでしょうか？——彼は、自分の作品の中で、また行動の中で、どのような世界観を私たちに与えようとしたのでしょうか。人間が繰り返し問いかける、自分の人生に与えるべき意味についての問いに対して、彼がどのような返答をするのかを尋ねてみましょう。

ロランはいつも自分の中に「人生に対する悲劇的なペシミズムの生来の感覚」(VI, 244)を認めていました。彼の自伝的作品の中から以下の一九二六年の記述のような箇所を収集してもきりがありません。「人生を、我々の人生を、虚無に直面して肯定すること」(VI, 335)一九一〇年、彼がまだそれを書くことを断念していなかった「マッツィーニ」によせて、ロランは自分が歩む方向を示唆しています。「私は人間の魂の中に、炎に抵抗する金属、すなわち、死よりも強い精神を捜し求める。そしてそれが虚無の深淵を乗り越えようとする行為を伴っているかどうかを見究める」¹²。ロランは彼の作品を通して人間を「時の深い堅穴の上にかかる、もろくて目もくらむような橋のアーチとして」描こうとしているのです (VI, 335)。ああ！ 私たちがいつもロランのあらゆる作品の中に見出すこの深淵の、空虚の、溝の固定観念と、そしてこの「死よりも強い精神」の対照！

『オルシーノ』は別として、彼の若い頃の演劇は全て、圧倒的な虚無と死に取り憑かれています。『ジャン・クリストフ』の中にも、これと同じものが存在していることがわかります。この小説の源泉となっている一九〇一年の呼びかけの叫びを思い出していただきたい。「私は、すでに死んでしまった人々や、やがて死んでしまう人々のことを考え、空虚が包み込み、死のまったただなかで転がり、そしてまもなく死んでしまうであろうこの全地上のことを考

える」(J.C. XII) 一九三八年の九月二十八日に、ロランはさらにクリスチャン・セネシャルにこう打ち明けています。「結局は、人生とは普遍的な死への挑戦です。その挑戦は、生命の欲望か、あるいは絶え間ない活動に満たされた人にか不可能なのです。水車の音が止まる頃、静寂はひとつの深い堅穴であり、私たちは落ちていくのです」(ibid. 400)。一九四四年の二月にヴェズレーで画家のゼルヴォと対話したとき、ロランは自分がごく若い頃に「深い堅穴の底へ到達していた」と告白しています。彼はそれ以来、人類が文明の廢墟の下に埋もれて、その深い堅穴へ転落していったのを見たのです。

この現実には直面して、いかなる態度を取るべきでしょうか？ ロランも、かくも巨大な不条理の前にして、絶望に屈してしまう誘惑をいつも避けたというわけではありません。時には彼の「人類への嫌悪」はそれほどまでに甚だしかったのです。彼の晩年期は、失望の発作によって暗いものにされています。すなわち一九四〇年の六月、そして八月に彼が感じた「魂の大きいなる疲労」の時です。「私はこの人類の残忍な愚かしさに心臓をきつく掴まれているように思いた、人類は、数千、数万年来にわたる勤勉な進化の挙句、いまだに何百万人単位での殺戮をしている」[...]全世界に対して自分の思考様式と、自分の意志を押し付けようとする一人の人間の狂気のせいだ。神はなぜその踵の下に、この愚かな人類を押し潰してしまわないのか！」「もうたくさんだ！ 人生にも、人間にも、大地にも、私たちがそこにつなぎとめておくだけの価値がない。まともな物はほとんどない、軽蔑すべきものばかり、そして救済はない。死が訪れる時には歓迎しよう！」一九四四年の六月に「地球全体にのしかかる惨たらしく愚かな戦争の空気」が語るとてもつもない「悟り」も、やはり同様です。「私は、『人間の条件』というこの悪夢から、永久に逃げ出したい」

たとえ時にはこれらのベシミスティックな発作に押し流されても、ロランはいつもそれを制御する術を知っています

した。彼は、「人生の前と後の間にある私たちの夜を照らし出す光のきらめき」(J.C. XII)を求めながら、虚無と戦うことをやめなかったのです。彼にとって、人間の運命は、個人的で、地上的で、かつ死すべき実存の単なる曲線よりも、もっと広大なものに見えていました。なぜなら個々の人生は、本質的なものを、すなわち人間的な事物の彼岸にあるものを隠蔽しかねなかったからです。そしてロランはこの彼岸を青年期から予感していました。彼はそれを繰り返して述べています。一八九六年から、彼は以下のことを思い起こさせるといふ目的に没頭します。「神は常にその多様な様相のうちのひとつをつと、常に永遠の力である。本質的なことは、それぞれの内でこの力を呼び起こすことであり、それを燃え盛る炎の中に投げ入れることであり、永遠を燃え上がらせることである。」(VI, 247) この表現はしばしば引用されています。これに、一九二四年の七月十六日に、友人であるルイズ・クリュッピに対して打ち明けた話を付け加えてみましょう。「私のような存在は、ある種の謎です。それを解く「宗教的な」鍵はフランスでは一切知られておらず、滅多にお目にかからないものです。」この「宗教的な鍵」がなくては、ロランを理解することはほとんど不可能です。しかしながら彼は、『内面の旅路』の中で、しばしばこの問いに立ち戻ります。他の引用の中から、特にこの二つを挙げてみましょう。「宗教は未来の希望ではない。宗教は永遠なるものの内での現在の生である、——つまり直接的啓示である。深い人物なら誰でも、私たち自身の中に、神、絶対的な魂、永遠の私が存在していることを知っているし、感じている。[...] 神の炎の火の粉は、良き意志を持つ全ての魂の中で養わなくてはならず、成長させなくてはならない」(VI, 332) 第二の引用を見てみましょう。「神はいたるところに存在する。剥き出しの宗教。存在と神の肉との裸の接触、神の実体そして時間と永遠との結婚」(VI, 207) 一九二七年、フロイトとの対話においてロランは、彼の内でいつも感じられてきた、彼が「宗教的『感覚』」とか「永遠」の感覚という単純で直接的な事実」と呼ぶものについて主張しました。この「豊かで恩恵に満ちた」「宗教的エネルギー」の中に、彼は「常に生命の更新の源を見出して」(C17, 265-6)きたのです。彼はいつもこの「普遍的存在への直観的信仰、

生と死の消すことのできない炎」(VI, 244) を持っていたのでした。

ロランは最後までこのようでありました。彼のあらゆる作品は多声的で、ジャンルを問わず——演劇、伝記、小説、自伝、エッセイ——、間断なく、この世界の宗教観、永遠の現存を表現することを目指していたのです。「生と死。永遠の力」虚無に対してロランは生を指定し、幾度か絶望の叫びを上げつつも、人間性への無限の愛を弁護しています。彼は一九〇一年の呼びかけに忠実です。「兄弟たちよ、歩み寄ろう、私たちを隔てるものを忘れよう、私たちが等しく混ざり合っている共通の悲惨のことだけを考えよう！ 敵はいない、悪人はいない、いるのは惨めな人々だけだ。そして持続可能な唯一の幸せは、理解しあい、愛し合うことなのだ」(JC, XIII)。全ての人間は、ひとつの同じ「普遍的な魂」に結びついているのではないのでしょうか？ 彼らは「ベートーヴェンの晩年の作品のそこかしこに存在する神に」結びついてはいないでしょうか。また、ロランは、とりわけ第九交響曲の中に、ロラン自身のものに極めてよく似た「燃え盛る神秘主義」(B, 977-8) のしるしを見出すのです。

私たちはさらに、他の本に比べてあまり読まれていないロランのいくつかの本にも、それに値するだけの注意を払わなければなりません。

私は「クレランボー」の重要性については議論しません。「フランスにおいて、私の友人のうちでもほとんど誰一人として理解しなかった」と、ロランは注意を促しています。「アメリカやドイツなどのアングロサクソンの国では深みを持つ「クレランボー」の「宗教的行動」も、ラテン系の国では何でもなかった。」(VI, 274) と彼は残念そうに記しているのです。

私はむしろ『生けるインドの神秘と行動』について、従って、ラーマクリシュナとヴィヴェカーナンダの生涯について議論したいと思います。ロランはこの一連の仕事をとでも重視していました。彼は偉大なインド人のなかに、彼自身の「隠された思想」(I, 224)を見出していったのです。すなわち、個別的な存在の、大いなる全体との分離不可な統合の感情であり、普遍的なものへの帰属の感情、何か無限なものへの感情、大洋的な感情です。まさしくこの神秘的で宗教的な感情について、ロランはフロイトに宛てた一九二七年の十二月五日に始まる手紙の中で長々と説明していたのです。これらの著作の中で、彼は「著者は「…」おそらく「…」自分の書いた他のどの著作におけるよりも、自分の形而上学的で宗教的な思想を明らかにした」(C17, 298-9)と認めています。彼は、読者に自分の慣れ親しんだこの無限と絶対の感情を与えることによって、彼らの心の中に魂の扉を開くことを目指しているのです。インドの宗教的神秘について語ることは、「海の底に飲み込まれた——しかしいつでもまた現れ出ることのできる、西洋の魂の奥底」(C, 299)を呼び覚ますことではないでしょうか？　ロランは、自分が若い頃から絶えず感じてきた感情を再発見するという思いが強かったため、これらの伝記の中で、さらにはこれらの偉大なインド人たちの思想を研究する中で、そのことを強調せずにはいられないのです。神との接触、絶対者との合一。ロランが、自分をまったく理解しない「ウーロッパ」誌の新しい幹事であるジャック・ロベールフランスに、彼の本を「人—神ラーマクリシュナと、ヴィヴェカーナンダの福音書」というタイトルで広告するよう頼むのは、まさに挑発からなのです。ロランは哲学あるいは宗教の見かけを越えて、唯一の源泉、すなわち「人類の魂」を見出そうとしているのです。

私が議論したい別の作品は、誤解の多いロラン第二の連作小説で、一九二一年に始まり一九三三年に完結した『魅せられたる魂』です。大変しばしば、ロランはこの著作の重要性を強調しています。特に彼が政治へのアンガージュ

マンをしている真つ最中に書かれた、二巻構成になつてゐる、最後の章の『予告する者』に關するところがそうです。一九二七年十一月十一日、彼がこの最終部を思いついたとき、ソフィーア・ペルトリーニに次のように告白しています。「私は『魅せられたる魂』の最後の部分の準備をしています。そこは、遺言的な特徴を持つことになりそうです。というのも私はそこで（宗教的著作「彼の『生けるインドの神秘と行動』におけるのと同様）私の思想の根本を述べようと考へているからです」（C11, 313）。作品が完成すると、一九三四年の六月二十六日、彼は友人のリュシアン・ブライヌにこう主張しています。「最後の二巻は、私がこれまでに書いた中でも際立つて、最も重要なものです。——社会的闘争についてだけでなく、——生と死について。マルクの死、アンネットの死は、私の遺言なのです」同様に、ロランはジャン・ゲーノにも打ち明けています。「アンネットの死を描いた最終章は、私の最高のものであり、あるいは少なくとも、私の一番の秘密だと思つています」（C23, 280-1）。

それでは、ロランをよりよく理解するために、これらのページを注意深く見てみることにしましょう。一九四四年の八月、「忘却の年月の後」、これら最後の巻を読み返しながら、彼は次のように述べていますので、なおさら注目したいところです。「私は、それがまだ誰もその並外れた豊かさに気づいていない偉大な作品であることを、驚きとともに発見した。」「偉大な作品」という判断をめぐつては、異論のある人もいるでしょう。しかしロランが示しているこの作品のもう一つの側面を無視することはできません。その「並外れた豊かさ」、これは少なくとも彼がそこに与えている重要性和、私たちがそこに持ち込むべき関心を強調しています。

一九二一年から、ロランは総体的な計画を綿密に作り上げました。総題である『魅せられたる魂』は、意図的に謎めかしてあります。しかし長大な準備用ノートは明確なものです。ロランは情熱に駆られた魂、すなわち「見えない

エロス」が、「四つか五つの形を」続けざまにとる、アンネットの魂を描こうとしたのです。すなわち父親への愛、姉への愛、息子への愛、人類への情熱的な愛です。「第五番目の形、最後の形は、——（彼女が壮年期に達してすでにそれを越えているとき）——神へと、無限の方へと向かう——。神秘的で深い人生になるだろう「……」何一つとして外に透けて見えるもののない人生に。」この結末は、この書物全体に光を投げかけ、宗教的な意味を与えるに違いありません。

登場人物を創作するために、ロランはとりわけ、多くの点で彼自身の経験を思い出させる「偉大な女性神秘家」の例を参照しています。恍惚の時、この神秘家は神の實在性の確信を持っています。「神の経験」をしながら、「宇宙的な魂に抗し難く惹きつけられた魂」を感じつつ、神秘家は「至高の實在、あらゆる事物の究極目標」を発見したのです。「生き生きとして勝ち誇った力、「……」時間や空間や善や悪の向こう側にある本質的存在」。

「征服者」や「人間の条件」、「希望」のマルローのように、ロランは自分の語りと登場人物を現代生活の中に導き入れます。それらを通して、彼は人間の運命についての大きな問題を立てるのです。生と死、愛、ヒロイズム、個人と社会、……。彼はアンネットとその息子マルクを、彼らの時代への参与や問題と格闘している姿を描こうとしましたが、彼は作品の深い意味を忘れてはいませんでした。「死の時間、魂は裸になる、何も持たない、入り口にたった一人だ¹⁶」自分を夢中にさせた最後の「魅惑」を拒み終えた後、彼女は「恐ろしいこと」に遭遇します。「彼女はずっと、自分の感じているものが、体と存在の内壁を越えて——普遍的な存在の中で響き渡っているという深い印象を持つた¹⁷」

「魅せられたる魂」の最終部、「予告する者」が、「ひとつの世界の死」と「出産」という二巻の本として現れた時、その意味は必ずしもよく理解されたわけではありませんでした。人々はそこに——そして正當にも——政治へのアンガージュマンの表現を見たのです。しかしこの本を、そのような限界の内に閉じ込めてはなりません。この書物はこうした限界を超え出ているのです。「人間の条件」や「希望」を、共産党の立場を擁護するためだけのものに還元する人がいるでしょうか？ 「予告する者」の中では、登場人物が自分たちの時代の生活に参与するというこの側面は全て、それに先立つ巻と同様に、ロランが「現在のロープ」や「世界の衣」と呼んだことにすぎません。本質的なことは、そうではなくて、この小説の核心においてキアレンツァ伯爵の物語を通して告げられています。洗練された研究者、悲劇的状況の犠牲者だった伯爵は、エンベドクレスやピタゴラスの哲学的認識、そしてインドやオリエントの神秘家たちの認識によって静謐さにまで導かれた人であって、彼は一切の虚無を知っています。政治的喜劇から離れて、彼は仮象の世界の向こう側へ突き抜けるのです。

彼のおかげで、アンネットは自分の人生の意味を悟ります。この小説の最後の四〇ページは、彼女の究極の解脱が告げられる瞬間を強調しています。アンネットの視線は仮象のヴェールを貫き、「存在の深い堅穴」(AE, 1429)を探索します。そして彼女はここにもまもなく溶け込んでしまうのです。彼女は、「無意味な衣を、肉体のシャツを、そしてその熱とその死すべき魅惑を脱ぎ捨てる」(AE, 1429-30)べき時がすぐにやってくることを知っています。臨終の瞬間にはすべてが輝き、アンネットは自分にこう言うのです。「さよなら、アンネット!……今私は分かった」(AE, 1461)。この「私は分かった」は人生の意味を明かし、世界の哲学—宗教観を表現しています。死によって、それだけで結局、魂は決定的に「解脱し」、自由になり、存在と溶け合う。その時、「魅せられたる魂のサイクルが完成」(AE, 1461)、全体のタイトルの謎が明かされ、別のタイトルの意味が明らかになるのです、すなわち「予告

する者』の意味が。アンネットはある人たちが考えたように、新たな世界や歌う明日の「予告する者」ではありません。彼女は、ロランが生に対してどんな意味を与えたのかを告げているのです。読者は、瞬間の感情を越えた「真の生」の秘密を発見するために、ヒロインとともにこの人生の全行程を辿らなければならないのです。

こうしてこの小説は、人類にその偉大さをなすものを説こうとするロランの一連の作品群に加わるのです。目を見張るような長い一貫性で、ロランは若き日の『クレド』に忠実です。「死、それは力に溢れた完全な生である。死は私に真の存在を返してくれる。死は私が支配したい幻を断ち切り、普遍的な生についての幸福な意識の内に入り込むようにさせてくれる。……」ロランは、「私は変わったなどは、誰にも言わせない」と言う時、当を得ているのです。

私たちにはまだ、ヴェズレーで書かれた作品の中にもこれと同じ一貫性を指摘するという仕事が残っています。しかしその話をする、皆さんの辛抱強さに付け入ることになってしまいます。ベートーヴェンについての最後の偉大な書物だけでなく、最後の扉の敷居にさしかかったときに、クローデルとの対話におけるロランのまったくもって宗教的な態度について、少々触れるにとどめたいと思います。

ベートーヴェンについてロランが「最後の作品の解脱、通過的形態と戯れ、存在のただなかに入り込む魂がただ神とともにある状態」(B, 868)を好んで思い起こすとき、彼はアンネットの死について語ったことからそれほど遠くにいるのでしょうか。「人類を永遠へ送り届けるための橋を建設すべく」(B, 869)働こうとしていたベートーヴェンのあの姿がロランの全ての作品を要約するものであることを、どうして見落したりするのでしょうか？

私はもう一つの言及、つまりロランとクローデルの対話に触れて、終わりにしたいと思います。一八八〇年代にワーグナーの『バルジファル』と一緒に聴きに出かけていた二人のルイ・ル・グランの卒業生は、マリー・ロランのおかげで、再会することができました。一九四一年の十二月のこと。クローデルは、友人ロランにバリで会おうとしました。しかしロランはほとんど身動きが取れなかったので、クローデルに、「君のほうが健康なのだから、来てくれるわけにはいかないか?」「……」僕はわれらがベートーヴェンの声で、鍵盤に合わせてしゃべってあげよう。そして君は精神の偉大な音楽でもって答えればいい。それは人生の酒だ。来る日も来る日も世界が廃墟となっていく音を聞くような、大規模な破壊が行われる不吉な時代で、永遠の事物について語り合うことは、とても素敵だ。」驚くべき対話をしように思っていたのです! 音楽作品は言葉となり、詩は音楽となる! しかし、とりわけ、ロランの世界観・人生観の中心そのものにあった、死よりも強い精神というこの根本的なテーマを発見しない手があるでしょうか。大規模な破壊と、廃墟と化した世界を前にして、永遠の事物が残っているのです。

ロランはそこで彼の「真の本性」を表現しています。私たちが、ついに今こそ、まず何よりも先に目を向けねばならないのは、他でもなく、この本性ではないでしょうか?

1 — Cité par Olivier Henri Bonnerot, (L'esthétique de Romain Rolland), *Cahiers de Brèves*, n° 8, septembre 2002, p. 28.

2 — *Salut et fraternité* (挨拶と友情): *Alain et Romain Rolland*. Correspondance et textes présentés par Henri Petit, (Cahiers Romain Rolland) n° 18, Albin Michel, 1969, p. 95 et 120.

3 — *Temoignage publié en 1925, cite par Zbigniew Naliwajek, Rolland en Pologne (1910-1939)*, p. 64.

- 4 — *Printemps romain* (『ローマの春』) Choix de lettres de Romain Rolland à sa mère (1889-1890), (Cahiers Romain Rolland) n°6, Albin Michel, 1954, p. 171.
- 5 — *Romain Rolland et la NRF*. Correspondance avec Jaques Copeau, André Gide, André Malraux, Roger Martin du Gard, Jean Schlumberger, Gaston Gallimard et fragments du Journal. Présentation et annotation par Bernard Duchatelet, (Cahiers Romain Rolland) n°27, Albin Michel, 1989, p. 279.
- 6 — Lettres du mai 2 1929, à Charles Baudouin, *Correspondance entre Romain Rolland et Charles Baudouin*, édition établie, présentée et annotée par Antoinette Blum, Avant-propos de Yves Baudouin, Lyon, Césura, 2000, p. 160
- 7 — Lettre inédite, à Louise Cruppi, 3 septembre 1917.
- 8 — Cité par R. A Francis, *Romain Rolland*, Oxford-New York, Berg, 1999, p. 236.
- 9 — *L'un et l'autre II*. Correspondance entre Romain Rolland et Alphonse de Chateaubriant (1914-1944). Préface et annotations par L.-A. Maugendre, (Cahiers Romain Rolland) n°30, Albin Michel, 1996., p. 424
- 10 — Cité par Jean Lacouture, *André Malraux. Une vie dans le siècle*, Seuil, 1973, p. 171.
- 11 — Cité par Lacouture, op. cit., p. 219.
- 12 — Susanna Gugenheim, *Romain Rolland e l'Italia*, Istituto editoriale cisalpino, Milan-Varese, 1955, p. 63.
- 13 — Cité par Bernard Duchatelet, Romain Rolland. *La Pensée et l'action*, Université de Brest, 1997, p. 177.
- 14 — Id., *ibid.*, p. 146.
- 15 — Sur cette «grande mystique», voir *ibid.*, p. 146, note 2
- 16 — Id., *ibid.*, p. 155
- 17 — Id., *ibid.*, p. 156.
- 18 — *Le Cloître de la rue d'ulm* (『ルンネー街の修道院』): *Journal de Romain Rolland à l'École Normale* (1886-1889). Avant-propos d'André George, (Cahiers Romain Rolland) n°4, Albin Michel, 1952., p. 377.

略号リスト (邦訳が出ているものに関してのみ邦題を記した)

- A.E: *L'âme enchantée* (『魂ゆかりの巻』), édition définitive en 1 volume. Albin Michel, 1967.
- B: *Beethoven, les Grandes époques créatrices* (『ベートーヴェン：偉大なる創造の時期』), édition définitive en 1 volume. Albin Michel, 1966.
- C11: *Chère Sofia* (『ソフィアの手紙』). Choix de lettres de Romain Rolland a Sofia Bertolini Guerrieri-Gonzaga (1909-1932), (『Cahiers Romain Rolland』 n°11, Albin Michel, 1960.
- C17: *Un beau visage à tous sens* (『美しい顔の巻』). Choix de lettres de Romain Rolland (1886-1944). Préface d'André Chamson, (『Cahiers Romain Rolland』 n°17, Albin Michel, 1967.
- C23: *L'indépendance de l'esprit* (『独立の巻』). Correspondance entre Jean Guhenno et Romain Rolland (1919-1944). Préface d'André Malraux, (『Cahiers Romain Rolland』 n°23, Albin Michel, 1975.
- I: *Inde Journal 1915-1943* (『インド』), Albin Michel, 1960.
- JC: *Jean-Christophe* (『ジャン・クリストフ』), édition définitive en 1 volume. Albin Michel, 1966.
- M: *Mémoires et fragments du Journal* (『回顧録』), Albin Michel, 1946.
- QAC: *Quinze ans de combat* (『奮争の15年』), Rieder, 1935.
- VI: *Le Voyage intérieur* (『内面の旅』), *Songe d'une vie*, édition augmentée, Albin Michel, 1959.

はじめての翻訳をして

村 永 京 介

日頃、仏文科の学生としてフランス語に触れている身ではあったが、「翻訳」という作業は私にとって初めての取り組みだった。この機会が私にもたらしてくれた発見は計り知れない。己の学力の未熟さを再認識したことは言うまでもない。それ以上に、デュシャトレ氏の見事な論法、それによって紡ぎ出される説得力に、終始圧倒され続けた。文献をただ読んでいただけでは到底発見できなかった新鮮な驚きである。

通常私たちは著者の用意した論の道筋に導かれながら理解を進めていくのであるが、その語り口そのものに目を向けることは少ない。そこには周到な計算や創意工夫が織り込まれている。「翻訳」という作業は、そのような骨組みをいったん相対化してからでないと成功しない。語られている内容だけでなく、その背後に控える著者の「企み」にも敏感になることによって初めて、より主体的な読解が可能になるのだろう。

この自覚は、翻って、今後私自身が「語る」場面においても重要な示唆を与えてくれるに違いない。きっとそれはフランス語と日本語の違いを超えたところにある、最もベーシックな部分に関わっている。「自分の考えをいかに分かりやすく伝達できるか」、「相手の言いたいことをどれだけ注意深く受け止められるか」という命題は、学術的な場面のみならず、私たちのコミュニケーション全般で問われていることでもある。

このような発見が、今回の訳文にどれだけ反映されているかは読者の皆さんのご判断にお任せするとして、私の拙い訳文を根気強く手直しして下さった、村上先生に心からの感謝の気持ちを手紙を捧げたい。

(京都大学文学部仏学科・修士課程)

ベルナール・デュシャトレ『あるがままのロマン・ロラン』概要

Bernard Duchatelet: ROMAIN ROLLAND tel qu'en lui-même

ouvrage publié avec le concours du Centre national du Livre

(ALBIN MICHEL, 2002)

村上光彦

デュシャトレ氏はフランスにおけるロマン・ロラン研究の第一人者として知られている。氏のロマン・ロラン研究としては、著書に『ロマン・ロラン作「ジャン・クリストフ」の創造過程』（一九七八年）、『ロマン・ロラン。思索と行動』（一九九七年）があり、編書に『ロマン・ロラン「最後の扉の敷居で」——往復書簡および未発表テキスト』（一九三六—一九四四）』（一九八九年）、『ロマン・ロラン、リュシヤンおよびヴィヴィヤヌ・ブイエ、往復書簡』（一九三八—一九四四）』（一九九二年）、『アンリ・バシュラン「アンドレ・ジイドおよびロマン・ロランとの往復書簡（B・デュシャトレ編・注）』（一九九四年）などがある。また一九九四年十月には、ロマン・ロラン没後五十年記念講演のために来日した。そのときの「神秘と政治——ロマン・ロラン、その思索と行動とのあいだ」と題する講演のテキスト（仏文および邦文）は、本誌第二二号（一九九五年）に収録されている。

デュシャトレ氏の『あるがままのロマン・ロラン』は二〇〇二年三月にアルバン・ミシエル社から刊行され、同年、

アカデミー・デ・シヤンス・エ・デ・レトル賞を受賞した。

以下に本書のあらましを紹介するためにその目次を提示し、各章の節ごとに内容の要約を記した。

目次

まえがき……………9

著者はロランの人生を語るにあたり、ときにこれを細分化するかにみえる危険を冒して、この人物の閨歴、彼の思想の進みゆき、彼の作品の制作を混ぜ合わせつつ、年代を追ってその展開の跡を辿った。

第一章 自己の征服（一八六六—一八九二）

1 へかわいそうに、無邪気な子だけれど、精神的エネルギーが足りなくて……………15

著者はまず両親の家系の特徴を示してから、地方都市クラムシーでのロランの幼少期を語る。生まれてまる一年も経たないとき、家事見習いの娘がカーニヴァルのダンスパーティーに早く出たくて、雪の積もった寒いバルコニーに赤ん坊を置き忘れていった。ロマンは毛細気管支炎にかかり、一生その後遺症に苦しめられた。十一歳のとき、小学校の同級生とともにジュール・ヴェルヌばりの長編小説を書くなど、すでに作家としての片鱗が見て取れる。この子どもは、世界にひとりきりで幽閉されたような感覚の持ち主だったが、音楽が解放の扉を開け放ってくれた。

2 (わが若き日の暴風)

21

母親はわが子を(グラランド・ゼコール)(高等専門学校。一般の大学が大学入学資格者にたいして門戸を広く開いているのにたいし、(グラランド・ゼコール)は難しい競争試験によって選抜された学生にたいする教育機関である。エコール・ノルマル・シュベリユール[高等師範学校]、エコール・ポリテクニク[理工科学校]、エコール・ナシヨナル・ダドミニストラシヨン[国立行政学院]など有名で、それぞれの卒業生は各界のエリートとして活躍する)に進学させて最高の教育を受けさせようと思ひ立つ。そのため、一八八〇年、彼が十四歳のとき、一家を挙げてパリに移り住む。パリに出た彼は都会の世紀末的空氣に触れて、幼い日のカトリックの純朴な信仰を失う。しかし十五、六歳のころ、目に見える現実の向こうに別の實在が存在するという、一種の神秘体験をする。一八八六年、彼はエコール・ノルマル・シュベリユールに合格する。

3 (われわれはだれもが(神)である)

29

進学後、彼は文学に進む決心をする。彼は哲学者ルナンに手紙を書き、会いに来るように言われて面会する。彼はルナンをストア派の哲人のように思い描いていたが、会ってみると偉大な懷疑派で、人間や事物を晴朗なまなざしで眺め渡すことのできるホレイシヨのような人物なのがわかった。ルナンと接したおかげで、彼は人生にたいして超然たる態度をとる生き方を学んだ。スピノザ、トルストイ、ワグナーのあと、ルナンも新しい師となった。エコールで、彼はシュアレスと友だちになった。この友情は曲折を経ながらずっとのちまで続く。八七年四月、彼はトルストイに日ごろの思いを書き送り、十月にトルストイから返事をもらう。翌年、彼は「真であるがゆえに私は信じる」と題する哲学論文を書く。八八年七月、彼はエコールを卒業し、翌年には歴史学の教授資格を取得する。すぐに教職に就く氣のなかつた彼は、息子を手元から放すまいとする母親に逆らつて、ローマ学院への留学の道を選ぶ。

4 〈永遠〉をじつに確固として信じつつ

44

八九年十一月、彼はイタリアに向かう。トリノ、ミラノ、フィレンツェ、シエナ、オルヴィエトの各地で、彼は熱心に美術館を見てまわり、数々の名作と出会う。ローマのファルネーゼ宮に部屋を与えられ、ピアノを置かせてもらった。彼の研究題目は十六世紀の駐仏教皇特使サルヴィアティ枢機卿の研究にあった。やがて、彼はローマでマルヴィーダ夫人（ニーチェやワグナーと交友のあったドイツの女性）と知り合うが、そのことは生涯をつうじての重要な意味をもつ。夫人の家で生涯の友となるソフィヤとも出会う。九〇年三月には、ジャニコロの丘でジャン・クリストフの幻を見た。そのあと、彼はワグナーふうの音楽小説に挑戦している。

第二章 試練（一八九二—一九〇二）

1 〈静かなやさしさ〉

63

九二年に帰国した彼は、ヴェルサイユに住む恩師ガブリエル・モノーの家で、ユダヤ人の比較文法学者の娘クロティルド・ブレアル（ロランと離婚したのち、ピアニストのホルトと再婚する）と出会い、恋をする。ロランの母親は、クロティルドが衝動的で社交好きなのを見抜き、息子とは性格が合わないように感じた。しかし、結局は母親も折れて、二人は十月末にバリの第六区役所で結婚式を挙げる。イタリアでの新婚生活は幸福なものであった。九三年六月、若い夫婦はバリで所帯を持つ。ロランはリセ・アンリ四世校に就職した。一方、彼は劇作に取りかかり、妻は彼に助言したりした。なお、当時の彼はバリの雰囲気になじみず、社会が解体し、世界は崩壊しつつあるという印象を抱いていた。

2 〈ぼくらの哀れな結婚記念日〉

70

クロティルドは、夫が文壇で成功することを望んでいた。彼はそんな妻としっくりいかなかった。そうこうするう

ち、一八九五年六月、博士論文公開口述審査に優秀な成績で合格する。だが、彼の志はいかかわらず文学にあった。そして、時代の空気への反抗心は高まるばかりであった。そのころ、彼は社会主義を発見する。死が今日のヨーロッパを脅かしている。免れる希望があるとしたら、道は社会主義にある。彼はそう思った。一方、一八九六年一月にいたって、クロティルドとの不和はいくところまでいった。とくに彼が不快に思ったのは、妻が彼女の親友の許嫁者であるレオン・ブルム（後年の首相）の悪童ぶりに甘かったことである。こうして不和が兆すなかで、それでも夫婦はドイツ旅行をともにしている。彼はこの旅行中に日記にどっさりメモを書き留めた。これがのちに『ジャン・クリストフ』の材料となる。

3 (わたしの魂の物語を、わたしより偉大な者に置き換えて) 79

一八九七年一月、彼はのちの『ジャン・クリストフ』の構想をまとめている。十五歳で宗教心の危機に見舞われ、十八歳から二十五歳までは恋愛の歓喜・悲しみ・絶望を重ねる。三十歳ごろには芸術の闘いが続く。三十歳から三十五歳にかけて貧しい人たちの窮迫、政治革命などに関心を向ける。そのあとに愛徳の時期が来る、といったプランである。二月には、彼は『ジャン・クリストフ』の下書きを百ページほど書いた。この時期、彼は『聖王ルイ』の雑誌掲載・上演を望んだが、いっこう実現しなかった。

4 (どの道を辿ったらよいか、辛いほどためらっている) 84

九七年四月末、彼は『アエルト』を書き上げてから、夏休みにイタリアへ向かった。彼とクロティルドとは、イタリアのさまざまな名士の家に迎えられ、ガブリエレ・ダヌンツィオと知り合って何度か会った。抑圧されたプロレタリアの惨状も見過ごせないが、流血の革命も受け入れられない、そうした知識人を描いた劇作『敗れし人々』と取り組んだのもこの時期である。ドレフュス事件の進行中で、彼は議論の圏外にながらも、無関心ではいらなかった。この事件を反映した『狼』、ついで『アエルト』があいついで上演された。教え子だったルイ・ジレを介して、やは

り教え子だったベギーから『狼』を刊行したいとの申し出があり、彼はこれを快諾する。

5 〈いまや決定的に縁が切れた〉

93

『狼』の刊行準備中、彼は『理性の勝利』と『ダントン』とを書く。だが、九八年は暗い気分のなかで終わる。妻がますます他人のように思えてきたからである。年末、彼はようやく『狼』を何冊か受け取る。一八九九年五月、ロランはデュッセルドルフ音楽祭のためにドイツを再訪し、『ルヴュー・ド・パリ』誌にリヒャルト・シュトラウス論を書き、そのなかでドイツに見られた〈病的な萌芽〉を指摘した。ロラン夫妻は同年夏、イタリアを再訪し、ダヌンツィオと再会した。一九〇〇年には夫婦の不和が募る。この年にも夫妻はイタリア旅行をとにもするが、旅行中に夫妻は別れることにする。帰国後、彼はベギーの『カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ』誌に「観念論の毒」を書く。彼はベギーを信念にもとづく〈革命の人〉と評価し、マッツィーニ流の〈なによりもまず真実〉を標榜する姿勢に共感した。一九〇一年二月、彼は妻と別居し、十月十一日に決定的に別れることとなる。

6 〈ソフィヤの心温まる共感〉

107

別居後の六月から七月にかけて、彼は神経衰弱気味で、自殺を思ったりした。八月、彼はサン＝モリッツで、十一年ぶりにソフィヤと再会する。彼女はその前年に結婚し、娘時代の面影はなかった。始めはよそよそしかったが、彼はやがて苦惱に堪えている賢明な魂を発見する。彼はこの再会のおかげで彼自身の平静を取り戻す。ソフィヤとのあいだに、堅固な基礎に立つ友情が残った。

第三章 新生（一九〇一—一九一四）

1 〈発作にも似た歓喜〉

115

一九〇一年十一月半ばから翌年一月半ばにかけて、彼は『ジャン・クリストフ』のノートを書き進めた。過労のた

めに肺を病んだりもしたが、彼は「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」誌に「ダントン」、「七月十四日」、「時は来らん」をあいついで発表した。ペギーは、フランス革命が成功しなかったからには、「われわれはそれを毎日やり直さなくてはならない」と語り、また「社会革命は精神的でなくてはならず、さもなければ成就しない」と語った男である。二人は理想を同じくしていた。一九〇三年一月に「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」誌に発表されたロマン・ロランの「ペートーヴェンの生涯」はたちまち大成功した。ロランはついに無関心の壁を押し破ったのである。

2 (わたしはいよいよ長編小説を書き始めた)

122

一九〇三年三月二十日、彼は「ジャンククリストフ」を書き出す。彼はこの日、一八九六年から一九〇〇年まで書きためた原稿を順序立て、主人公の生涯の意味を明瞭に示そうとした(最初の二巻は一九〇四年二月に刊行)。同年十一月、彼はソルボンヌ大学に任命され、また出身校のエコール・ノルマル・シュペリユールで音楽史の講義を担当することになった。それは公開講座で、とりわけ女性が詰めかけた。やがて彼は、「ジャンククリストフ」によって「幸福な生活」という賞を得る。「ジャンククリストフ」は、「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」版で出したあと、間をおいてオランダルフ社からも出すことになった。

3 (新ヨーロッパの建設)

132

一九〇六年十二月、ロランは場面がフランスに移ってからの「ジャンククリストフ」の構想をまとめる。真のフランスと真のドイツとが友邦となる、というのが彼の狙いであった。彼にとつて、その主人公は(ヨーロッパの)すくなくとも西ヨーロッパの)天才)となつていった。一九〇八年夏、彼はシェーンブルンで休暇を過ごした。ホテルには司祭が大勢泊まっていたが、そのなかのゲルル神父という近代主義的傾向の神父と共鳴する。ここではソフィヤとも出会った。パリに帰る前、彼はソフィヤに招待されてモンテベルーナのベルトリニ家で十日間ほど過ごした。「ジャンククリストフ」は外国でも好評だった。女性読者が接近しだすようになつたが、そのなかにはまじめな読者

もいて、ルイズ・クリュピのように心の友となった人もいる。

4 (いまの生活に、すっかり気を取られてしまつて)

一九一〇年、彼はシュテファン・ツヴァイクと知り合う。この二人はヨーロッパ人意識において共通していた。このころ、彼は組合運動に関心を寄せるが、資本の帝国主義が対抗しているようなので落胆する。カトリック教会の方面では、ピオ十世がマルク・サンニエ(キリスト教社会民主主義運動の創始者)を非難し、ロランが期待したゲルル神父さえ従順になってしまった。一九一〇年十月二十五日、彼は車にひかれ、左腕が骨折、左脚は脱臼して、三ヶ月身動きできなくなった。翌月、トルストイが死去し、彼はトルストイ論を書いた。彼はそのなかで、トルストイの肖像とともに彼自身の肖像を描いたのだ。翌年、彼はソフィヤに招かれてローマへ行く。帰国の途次、彼は自分がベギーとアカデミー大賞を争う形になっていたことを知る。

5 (いさかきをしていても、家は明るく自由にしておこう)

帰国後、彼はソルボンヌ大学に休暇を認めてもらう。当時のヨーロッパの青年には民族主義が強まっていた。ルイズ・クリュピの夫が法相になる前まで外相を務めていたので、彼はヨーロッパ情勢の知識を得ていた。西ヨーロッパに流血の時代を迎えてよいものだろうか、彼は五月にそう自問している。ヨーロッパ諸国の植民地政策も気がかりだった。そんな彼に、シュトラスブルク(仏領に戻ってからはストラスブル)大学で教えることになったエルンスト・ローベルト・クルツイウスという若い学者が近づき、理解に満ちた手紙を寄せたのは嬉しいことだった。

6 (わたしの真新しい魂)

一九一二年春、彼はソルボンヌ大学を辞職した。スイスの『世界文庫』という雑誌から、パリ通信を書いてほしいという依頼もあった。同年に『ジャンクリストフ』が完結するや、彼はだれ知らぬ者のない作家となつていた。フランスでも外国でも多大な反響があった。一九一三年二月、先年の交通事故の賠償金として二万五千フランが入る。

彼は新作『コラ・ブルニョン』の準備にかかった。六月、彼はアカデミー文学大賞を得た。長いつきあいとなるジャンヌ・モルティエから初めて手紙が来たのもこの時期のことだ。手紙や献本がたくさん届くようになったが、そのなかに心のこもった献辞を添えた、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの『ジャン・パロワ』があった。ロランは礼状を書き、この作品を熱心に読んだむね強調した。アメリカ人の若い女優——ロランは彼女に（サリー）（ヘレニズム時代の喜劇の女神タレイアに由来する。サリーは英語読み）という芸名を付けてやった——との関係が始まったものころである。二人は一九一四年一月七日に初めて会った。この年の六月二十八日、サラエヴォで凶弾が放たれた。彼は八月には『コラ・ブルニョン』の校正をすますつもりだったが、その前に戦争が勃発してしまった。

第四章 〈戦いを超えて〉（一九一四—一九一九）

1 〈精神の激震〉

彼はスイスのヴヴェーに来ていた。情勢が緊迫したのを見て、彼はパリに帰る気であった。年齢からも健康状態からも軍務を免除されていたのだが、それでも帰りがたかった。新作の校正刷りが届いた直後、宣戦が布告されたのである。彼は日記に、文明の破産に立ち会う悲しさを書き記した。しかし、ドイツ軍の攻勢によって祖国が危機に瀕しているあいだ、彼は黙っていた。マルヌの戦いの時期に「戦いを超えて」を書き、それは九月二十二—二十三日付の『ジュルナル・ド・ジュネーヴ』紙に発表された。彼は国際赤十字社に協力することにし、九月末にジュネーヴに移った。この時期にホテルで知り合ったエルゼ・ハルトフとの親交はその後長く続いた。フランス国内でアンリ・ギルポーやアメデ・デュボワがロラン擁護の声を挙げただけで、フランスからはロランがよいドイツ人と悪いドイツ人とを区別して考えるのを非難する声が届いた。ツヴァイクは沈黙していたが、クルツイウスの手紙やヘッセの論説は慰めになった。この苦難の時期にサリーがジュネーヴに来て、二ヶ月間そばにいてくれたのが彼にはありがたかった。サリーは

結婚したがったが、年齢が違いすぎるので、彼としては彼女に道理を言い聞かせるほかなかった。二ヶ月の夢のような幸福を胸に抱きしめて、彼女は一九一五年一月月上旬にアメリカへ帰っていった。

2 (わたしには、もはや世界という祖国しかない)

179

一九一七年一月、ロランは日記に書きつける。「過渡期にあるわれわれの魂は、いくつかの対立した理想に引き裂かれている。それでも、人類の理想と国民の理想とのいずれかを選ばなくてはならない。だが目前の恐ろしい争いを見て、彼はこれを《自然の革命》とみなすにいたり、しばらく沈黙する。やがて、フランスの社会主義者のあいだに国際主義による和平への志向を見てとり、彼は満足する。教え子のジレとの絶交といった事態も生ずる。一九一五年七月には赤十字社から退任し、ジュネーヴをあとにする。夏から秋にかけて、彼は新聞にはなにも書かず、のちの『クレランボー』の構想を練る。ベルヌに出向いてヘッセと会いもした。アインシュタインらが彼を訪れている。マルタン・デュ・ガールやシュヴァイツァーからは励ましのことが届いた。ジャン・ジューヴなど、支持者も現れる。一九一六年一月、彼はシェークスピアに没頭することで人類への信頼を取り戻す。

3 (新しい人類)

190

一九一六年には、メレーム、モナット、ロメールなど、組合運動指導者の言動に、彼は注意を向け出す。戦争の原因とメカニズムも分析できるようになった。他方、ヨーロッパ文明とアジア文明との融合も視野に入ってくる。ロシア人亡命者と直接接し、またギルボーをつうじてロシア国内での革命運動についての情報も得た。ロランはこうして、自分はそうと知らないうちに、ヨーロッパの大人物がレーニンの陣営に保証を与えている、という形になってゆく。そのあいだにもサリーとの文通が続いていた。宇宙の広大な力に個人の澄み切った魂の力で立ち向かってゆく、それが彼の根底にある思念だった。

4 〈わたしたちは身内に宿る永遠なるものに服従しなくては〉

『殺害された諸国民に』と『つづら折りの登り道』この二編の文章が彼の心境を示している。両者を対立させるより、内心をすっかり語り尽くすのをためらっている複雑な思考の証を見るべきだろう。一九一五年十一月、彼はノーベル文学賞を受賞した。たちまち、国内から裏切り者への非難が沸き立った。やがて、米国が参戦し、ロシアではツァーリが退位する。一九一七年春にはレーニンが帰国する。ロランは、革命を指導するのが怪物たちなのを知りつつ、なおかつ革命に期待する。だが、社会主義やポリシェヴィスムの仕事は必要ではあっても、精神の領域では不十分だ、というのが彼の考えであった。

5 〈どうにも悲しくて〉

一九一八年初頭、ロランは健康がすぐれなかった。ギルポーが対敵通謀の罪に問われて逮捕され、彼まで連座させられそうになった。三月二十九日（聖金曜日）には、パリの教会が砲撃を受け、七十五人の死者が出た。この事件を織り込んだ『ピエールとリュース』を、彼はサリーに捧げた。

6 〈精神〉の〈自由都市〉

ロランは〈精神の独立宣言〉の呼びかけを発する。その直後、休戦を迎える。だが、ドイツの社会主義政権が軍の助けを借りて革命運動を弾圧したので、ロランは幻滅する。一九一九年春、彼は〈精神のインターナショナル〉のために、全世界の知識人への呼びかけを発した。同年五月、母親が死去した。他方、バルビュスとの対立をはらんだ協力関係が始まる。

第五章 《精神の独立》（一九一九—一九二六）

1 《わたしたちのまわりでは、なにもかも意味もなく騒ぎ回って》…………… 225

一九一八年九月、彼はスイスのヴァルモンで一カ月入院し、結核の診断を受ける。翌年二月、期待していた若い友人ジャン・ド・サンブリが感冒で死去する。一九二〇年秋、「クレランボー」が刊行される。その主人公の平和主義はトルストイに由来し、本質において宗教的であった。サリーは米国でロランについて講演をしたりしていたが、ヒステリーの発作で入院させられ、その《牢屋》から出られたのは一九二一年十一月のことである。

2 《断じて独裁に屈しはしない》…………… 231

一九二二年二月、共産主義者のヴァイヤンクチュリエは『クラルテ』誌において、ロシア革命が暴力を用いているという理由で革命を批判する者に攻撃を加えた。これとまったく同時に、ロランは別の場所で、行動の必要によって精神を縛られることを拒み、入党するのは入隊するようなもので、党の規律と戦術とに従わされるとした。こうして彼は、プロレタリアート独裁に従属しないと声明した。このころ、彼はルーマニア作家イストラティを発見する。他方、新作の構想を練る。総題は『魅せられたる魂』である。

3 《わたしの重大任務は本来宗教的なのです》…………… 238

一九二二年十一月、ゴリキーが病氣と知って、ロランはとぎれていた文通を再開する。彼はそのなかで、理想は未来になって現実となるのだから、未来時の現実の宣教師であることを幸せと思ひましよう、と語りかけている。彼はこのころデュアメルおよびヴィルドラックと何度も会って行動方針について話し合った。マルティネとの論争も続いた。一九二二年十二月には、彼はザイベルにあてて「わたしの重要任務は、芸術上の仕事は別として、全世界の自由な魂を結集することです。それは本来宗教的なのです」と書き送っている。

4 〈内面の宇宙〉

246

彼を党派に巻き込もうとする相手に嫌気がさし、デュアメルなどの仲間がいるにしても、やはり孤立感がつよく、彼はスイスに移ることにした。一九二二年四月、彼は父親および妹とともにパリを去った。それでも、共産主義者たちは彼を放そうとせず、トロツキーはマルティネの『夜』の書評にこと寄せて、ロランを貴族主義だと批判した。アルコスが『ウーロップ』誌創刊を企て、ロランはこれを励ました。同誌創刊号は一九二三年二月に出た。彼はこの雑誌が思想結集の中心となることを期待した。タゴールの友人カリダス・ナグと知り合い、また『シッタータ』を書いたヘッセと一夜をともし、ガンディーの『ヤング・インディア』を読んだりもした。彼の『ガンディー』は一九二四年に刊行される。ヴィルヌーヴのヴィラ・オルガは国際的な出会いの場となった。そしてその年の二月に『夏』が刊行される。彼はツヴァイクにあてて「わたしは〈魅せられたる魂〉の内面の宇宙に自己を集中したいのです」と書いている。

5 〈精神〉にとつては、いかなる妥協もありえない

256

一九二四年四月、彼はまたも不眠症に取りつかれ、ヴァルモンで二週間静養した。その初夏、彼は『愛と死との戯れ』を書く。この作品において、カルノーは〈自然〉の法則の名において手を汚すことを肯んじる。クルヴォワジェは、これにたいし、断固として政治的狂信に立ち向かう。彼はこの時期、自分は気質からも思想からも決して共産主義者にはならないだろうが、それでもソヴィエト・ロシアに共感する、と書いている。

6 〈精神〉の永遠な本質

262

一九二五年一月、クリュピ夫人が死去し、これは彼にとって大きい打撃となる。彼はこの時期、数編の自伝的文章を書いている。そして政治的・社会的論争があいかわらず続いていた。彼はプロレタリアート独裁を批判しつづけた。一九二六年に『ウーロップ』誌がロラン生誕六〇年記念号を出す、彼はその準備の進行中は企画内容に満足し

ていなかった。だが、出来映えには満足する。とりわけ、アメリカ人や日本人が寄せたことばを嬉しく思った。一九二七年、父親がヴィルヌーヴで九十歳の誕生日を迎える。「魅せられたる魂」も順調に進んだ。

第六章 《精神》は列中に戻らなくてはならない（一九二七—一九三七）

1 《ロシア、危機に瀕す》

一九二七年二月、彼は反ファシズムの呼びかけに参加し、パリでの集会の名譽議長となった。「帝国主義列強の同盟に直面して、ロシアは危機に瀕している」とも書いた。だが、トロツキーやジノヴィエフが中央委員会から、ついで党から除名されるのを見て、彼は最悪の事態を恐れてもいた。他方、彼はこのころベートーヴエン研究に取りかかっている。

2 《われらの内なるもつとも永遠なもの》

一九二七年五月、ネルーについてジョゼフィン・マクリードが来訪した。マクリードはラーマクリシュナとヴィヴェカーナンダとをよく知っていた。ロランはインドの神秘思想について情報を集めているところであった。フロイトから宗教批判の書である「幻想の未来」を送られたが、それはフロイトのいう《宗教感覚》を論じた部分が興味深かった。彼自身、自分の内面に大洋感覚と幻想なき理性というふたつの水準があるのを見分けていたからである。十月にはデュアメルから「モスクワへの旅」を送られた。さらに詳しい情報を得たくて、彼はゴリキーにソ連の現実を教えてもらおうと思った。ゴリキーは亡命先のドイツ、イタリアから帰国したばかりであった。一九一八年初め、彼はジャン・ゲーノと知り合った。ゲーノは同年末に「ウーロップ」誌編集長となる。十五年来の交友のあったジャンヌ・モルティエとも会った。彼はジャンヌに友情を感謝している。そしてもうひとりの女性マリヤ・クダシエヴァとの文通も始まった。後年のロラン夫人である。

3 〈革命〉と闘うべきか、はたまた擁護すべきか

一九二八年九月、ソ連から帰ってきたツヴァイクは、ソ連では自由な知性は圧殺されているが、それでもソ連に向けてるのは誤りだと思う、と語った。ヴィルドラックからの手紙も、熱狂と奇立ちとが入り混ざった印象がこめられていた。一九二九年三月には「ヴィヴェカーナンドの生涯」が完成に近づいていた。ジャンヌ・モルティエはブレモン神父の「宗教感情史」などの資料を提供して助力になった。ロランはインド思想を語ることで、読者に無限感および絶対感をわからせたかったのである。

4 〈いとしいマーシャ〉

ロランはマリヤをスイスに招くために苦勞した。一九二八年十二月にはロランはマリヤを〈いとしいマーシャ〉と呼んで、おまえと書くようになった。二九年夏には、マーシャ、ソフィヤ、ジャンヌの三人が鉢合わせしそうになった。イストラティはソ連から帰ってきて、大量逮捕、シベリア流刑など、そのマイナス面をロランに報告した。ロランは革命にとって有害にならないよう、彼になにも公にしないように頼んだ。イストラティは、革命を破壊する輩を告発しないのは眞の革命家のとるべき態度ではない、と論じた。だが、この衝突にもかかわらず、二人の友情はすぐには損なわれなかった。結局、二人は一九三〇年三月に絶交する。彼がマリヤのことを、ソ連当局がロランをスパイするために送り込んだ女だとはほめかしたからである。そのあいだにもマリヤはロランといっそう親しくなり、デュアメルに頼んでスイス滞在期間を延長してもらったりした。デュアメルもまた、マリヤがロランをソ連に繋ぎ止める役をおわされているものと確信した。

5 〈過去への訣別〉

「魅せられたる魂」について、ロランは最初の狙いを堅持してはいたが、マルクをどのように成長させてゆくかが苦勞の種であった。マルクは、世界が溶解してゆくのを見て胸を悪くし、行動に身を投じようとする。では、どの方

向をとらせるべきか。レーニンとガンディーのどちらを選ばせるのか。そこにはロラン自身の矛盾が見て取れる。彼は同時にマルクであり、またアネットである。小説では、マルクは死に、アネットはそのあとをついで、自由な魂の極点に行きつく。一九三一年一月、ロランは言明する。「ソ連が脅かされたら、その敵がいずれであろうと、わたしはソ連の味方につく」。四月には、彼は莊重な「過去への訣別」を書いた。ゴリキーは彼に訪ソを誘ったが、父親の健康、それに彼自身の肺気腫のために実行できなかつた。一九三一年十一月から翌年一月にかけて、彼は『魅せられたる魂』の最後の五十ページの第一稿を書いた。西欧を頽廢から救うるのはソ連だけだと、彼は確信していた。ツヴァイクはロランに、パリに出るように勧め、なぜ西欧に背を向けるのか、と言った。だが、彼は拒否を貫いた。

6 《公行動》の《大洋》

一九三二年初め、ロランはレニングラード科学アカデミー名譽会員に選出された。ついでモスクワの《国際革命作家同盟》の依頼に応じて、攻撃された中国、脅かされたソ連の名において、援助を呼びかけた。八月―九月の反戦国際会議にも協力した。だが健康状態は思わしくなく、九月末には気管支炎で床につき、十一月半ばから十二月半ばにかけて、部屋から出られないありさまであつた。一九三三年一月にはアーシャが革命陣営に参加する部分を書き直した。同年六月半ば、彼はとうとう小説から解放された。だがこの年、ヒトラーが宰相となり、二月には議事堂放火事件が起こつた。ヒンデンブルク大統領からゲーテ勲章を授与するという申し出があつたが、彼は断つた。この年の十一月、十二月に、『魅せられたる魂』の最終巻が二冊本として刊行された。

7 《わたしは一日も休ませてもらえない》

フランスでもロランが読まれ出した。一九三三年九月には児童向けの『ジャン・クリストフ』が刊行されて成功した。一九三三年十二月には、セネシャルの『ロマン・ロラン』が出た。健康状態が不安定なのに、彼は反ファシスト闘争に参加しつづけ、一日も休ませてもらえなかつた。一九三〇年代には、ソ連支持者はロランだけではなくって

いた。ジード、アラゴン、ニザン、ブロック、マルローらも、ヒトラーを拒否しつつ、スターリンは受け入れた。皮肉なことに、これらの作家が共産主義に魅惑されたのは、ポリシエヴィキ党が容赦なく恐怖政治を敷いていた時期であった。一九三四年の末近く、ロランは妻となったマリヤに手伝ってもらって、『闘争の十五年』と『革命によって平和を』という二冊の社会政治論集をまとめた。

8 (わたしが間違っていて、フォーティンブラスが正しい) ……………

317

一九三四年、彼はモスクワ行きを決意する。おもな動機は、ソ連上層部に接触してマリヤと彼女の息子の安全を保障してもらうことにある。彼は六月十七日にスイスを出発し、泊まりを重ねて二十三日にモスクワに着いた。フランスソ連不可侵条約が前年に締結され、両国の関係は良好であった。そのころスターリンは反対派と死闘のさなかであった。二十八日、彼はスターリンと会談する。彼の日記には、スターリンは話し合うときは愛想がよいのに、スポーツ祭典の行列に列席するときはまるで皇帝だ、とある。滞在の後半には、彼はギリキーの家で三週間過ごした。だが、ギリキーとは立ち入った話はできなかつた。いつも体制のお歴々がいっしょだったからである。さまざまの人から恐ろしい話を聞きもした。彼は義理の息子セルゲー(数学学部の実験に合格したところだった)から、大学には抑圧の雰囲気がのしかかっているし、共産主義は嫌いだ、と聞かされる。だが彼は知人への手紙に、行動人にはハムレットのような夢想家の立場は許されず、行動人の見地からすればフォーティンブラスが正しい、と書き送っている。帰国後、彼は『モスクワへの旅』(没後にデュシャトレにより公刊)をまとめた。一九三六年一月、彼は七十歳の誕生日を迎えた。やがて首相になるブルムと和解した。彼は有名人になっていた。

9 (いまになってはつきりしてきたことが、わたしにはたくさんある) ……………

326

一九三六年六月、ギリキーが死去した。七月、ソ連新憲法が發布された。彼はおくれればせに成功し、パリの民衆の喝采を浴びていた。ところが当時の未発表の日記のなかに、いまや時の人となったロランの、表面とは対照的な内面

が語られている。モスクワ裁判の実状がフランスにも伝わり、ジードたちはソ連から離反した。彼は公然とはソ連を非難しなかった。ただ、スターリンにあてて死刑囚に極刑を課さないように書き送ったにすぎない。ギルポーは、ロランの態度の変化がマリヤのせいだと見抜いて、マリヤをクレムリンのスパイだと非難した。なおデュアメルもこれと同意見であった。そのあいだにもベートーヴェン研究も進んでいたし、また『ロベスピエール』の準備も進んでいた。

第七章 ヴェズレー（一九三七—一九四四）

1 「わたしが擁護しているのは、スターリンではなくてソ連なのだ」…………… 337

一九三六年十一月以来、ロランはスイスを去ろうと思っていた。言論の自由が狭まっていたのである。一九三七年八月、彼はヴェズレーに家を見に行つて気に入る。そのころには、ソ連との関係が変わってきた。ゴリキーは暗殺されたのだと認めないわけにいかなくなったのである。個人崇拜の危険について私信のなかで語りもした。ただし公然とは言えなかった。それでも、雑誌にスターリン礼賛の記事を書くことは断った。一九三八年六月、彼はヴィルヌーヴからヴェズレーに移った。国際情勢はますます悪化していった。オーストリアがドイツに併合され、独伊条約が締結された。彼はミュンヘン会談に反対した。ヴェズレーの老女たちは彼に唾を吐きかけようとした。それでいて、彼はフランス政府に辛抱強く交渉を続けてほしいという趣旨の反戦請願に署名した。一九三九年三月、ドイツ軍はプラハに入城した。「ウーロップ」誌のソ連革命三十周年記念号に、彼は革命を殺したとして、スターリン体制を間接的に批判した文章を書いた。スターリンの六十歳の誕生日を祝う文章を書くよう、ソ連から依頼が届いたが、彼は断った。

2 「大いなる〈幻影〉の最後の局面が終わった」……………

一九三九年八月二十三日、独ソ不可侵条約締結。ロランはこれを容認せず、即座に反応した。八月二十六日、ソ連

友の会を内密に（敵の宣伝に利用されないよう）脱会した。二十八日、ベルギー王妃が再度ロランに会いに来た。共產主義者だといわれるロランの家から王妃が出てくるのを見て、町の人たちはわけのわからぬ思いをした。九月一日、ポーランド侵攻が始まった。ロランはダラディエ支持の意志表明をした。ロランにとってもマリヤにとっても、最後の幻想まで崩れ去った。人生の転機にあたり、ロランは信仰の問題に思いを潜めた。〈神〉は信じなくなったが、〈存在〉の永遠は信じていた。

3 〈騒々しい蟻塚を、わたしはとうとうあとにした〉

.....

355

幻想が崩れたマリヤは信仰にすがった。クローデルを読み出した彼女は、彼と文通し、四〇年二月、改宗した。ロラン自身もそのころパリでクローデルと会った。三月には、彼はジャンヌ・モルティエと会った。彼女は彼とテイヤー・ド・シャルダンとを会わせようと試みた。四月半ば、クローデルはヴェズレーのロランの家に四、五日滞在した。折悪しくロランは高熱を發したばかりで、ベートーヴェンのピアノ・ソナタで彼をもてなすことができなかった。だが、二人はいっしょに「主の祈り」を唱えた。六月、フランスは敗北し、ヴェズレーにもドイツ軍が入ってきた。それに先立ち、ロランは知人に累が及ばないよう、大量の手紙類を焼却した。彼の日記帳七十五の表紙裏に「一九四〇」と記しただけの文章が書き留めてある。「前代未聞の、しかも絶え間ない激動によって平衡を失った時代に、揺れ動く思念が見せた精神絵図を、そのまま忠実に残しておく……」とある。

4 〈へりくだりだな、結局、なにかもそれだよ〉

.....

363

八月末には日記に「死にたい」と書きつけた彼だが、彼は忍耐強く仕事を続けた。狭い家に、占領軍の将校が何人か住んでいた。さいわい、ドイツ軍最高司令部のシュバイデル参謀長がロランが脅かされることのないよう、氣遣ってくれた。ドイツ軍将校のなかには愛読者が何人もいたのである。彼ばかりかマリヤまで病気になるたとき、彼はジャンヌ・モルティエに来てもらった。ジャンヌとマリヤとは宗教問題を果てしなく話し合った。彼自身、ジャンヌをつ

うじて、テイヤールの話を聞いたりして、カトリシズムが知的になったのを知った。ヌヴェール県司令部の将校たちのなかには、彼の最近十年間の発言を知りながら、それでも友好的協力を求める者もいた。だが、彼はドイツ軍の講演依頼は断った。彼はしだいに世俗から遠ざかっていった。

5 〔永遠なことども〕……………

369

ジャンヌ・モルティエとマリヤとは話が合い、いっしょにミサへ出かけた。ロランはベルナル神父と知り合って、たとえ〔神〕の存在は疑っても、われわれの内なる神性は疑えない、と語ったりしている。だが、彼の精神はいつも〔最後の扉の敷居〕で立ち止まってしまふのであった。信じようとしたのに、信じられなかった。三位一体の神は彼には受け入れられなかった。四二年三月、『内面の旅路』が刊行された。初刷一万部はすぐ売り切れたが、紙不足で再版は出せなかった。クローデルとの文通は続いていた。彼はクローデルのこともわかるようになったし、つきにはベギーを理解したくなった。四二年六月―七月にパリに出て、関係者からベギーの話聞いた。クローデルとも再会した。ベギーのことを書き進める一方、つぎの小説のことを考えていた。ここではクローデルとの友情が重要な役割を果たさずだった。他方、税金、医療費、食費、薪代がかさむというのに、財布が空になってきた。

6 〔わたしたちの魂はもう時間の外に出ている〕……………

377

一九四三年一月、風邪をこじらせて気管支炎となり、心臓疲労も加わって、一月末には死にはぐれた。幻覚を見たりもした。カトリック信者たちが彼の病氣回復を祈ってくれたのを知って、彼は感動した。しかし、心情的には信じられても、理性は信じようとしなかった。回復は緩慢だったが、やがてベートーヴェンのアダージオが弾けるようになった。デュアメルは新作を送ってよこさなかった。あとでそのわけがわかった。デュアメルはロラン夫妻をモデルにして、ロランを思わせる劇作家がモスクワから特殊任務のために送り込まれた女に丸め込まれる話を書いていたのである。死の床についた教え子のジレとは和解したものの、まもなく先立たれた。『ベギー』の執筆に戻った彼は、

ベギーの存在の中心をめざそうと志した。彼はベギーのうちに、永遠なるものの〈意志〉の〈必然〉のはたらきを感じ取った。一九四三年九月、彼が「ベギー」を書き上げかけていたとき、ロンドン放送はロランがドイツの強制収容所に入れられたと報じた。ラジオリアルジュにいたっては、「ロマン・ロラン死す」と虚報を流した。ロランの生地クラムシーでは葬式の支度にかかった。地方紙の主筆がヴェズレーへ虚報のお詫びに来た。電話や電報があいついだ。

7 (かたまりが大きすぎて、彼らの喉を通りきらないのだよ) …………… 385

一九四四年の初め、彼は健康がすぐれなかった。左肺はもう使いものにならず、咳が止まらなくて夜も眠られないありさまであった。戦争は新局面を迎え、ノルマンディー上陸作戦の準備が進んでいた。八月にはパリが解放された。だが、そのあとで非行や復讐が続いた。ロランは遠くから眺めていたにすぎない。彼は数ヶ月前に始めた『福音書ノート』の仕事に没頭した。共産党とソ連とがふたたびロランに関心を向けた。同年十一月、ロランは十月革命記念祝典に招待された。気は進まなかったが、彼は招待に応じた。「ベギー」のロシア語訳の申し入れに応じたさい、ロランはソ連での新作出版のさいには従来のように版權なしで応じることほししないと明言した。マリヤの息子セルゲーは一九四一年に戦死、その妻もすでに他界していた。十二月六日にソルボンヌで戦没知識人のための記念集會が開催され、その席上でロランの短いメッセージが読み上げられた。だが、政治的な発言ではなかった。全国作家委員会にも加わったが、それは人類と自由とを擁護するためで、党派的参加ではなかった。一カ月半パリで過ごし、ソ連大使館や共産党が用立ててくれると言った車でなく、知り合いの医師の車に乗ってヴェズレーに戻った。そのうち、咳と不眠がつづき、声帯が疲労して口もよくきけなかった。冬の三、四ヶ月が乗り越えられるか、心細かった。それでも、彼はそつとさせてはもらえなかった。共産党もカトリック教会も、ともに彼を引き入れようとした。彼は入党を拒んだ。神父たちにたいしては、キリストの神性が信じられないと言っておした。

四四年のクリスマスに、クロードルは短い手紙をよこした。ブイエ夫妻は八十キロの悪路を自転車で行ってきた。

マリヤは母親といっしょに教会の深夜ミサへゆくことにしていたので、留守を頼める夫妻が突然訪ねてくれたのを喜んだ。マリヤが出ていったあと、ロランはしばらくベートーヴェンの話をしていたが、いきなり肘掛け椅子の肘に手をかけて立ち上がった。「わたしたちのミサを挙げにゆこう」。彼は客の腕にすがって階下に降りると、ピアノに向かった。111番のソナタである。第一楽章では黙示録の騎手と一体化したようであったが、第二楽章アリエッタに入ると〈主〉の永遠を穏やかに確信しているように感じられた。最後の数小節とともに、歌は消えていった。

十二月三十日午後十一時、ロランは尿毒症で他界した。

エピソード 〈存在〉か、〈無〉か……………

393

『燃えるしば』において、〈神〉は言う。「わたしは〈無〉と闘う〈生〉である。わたしは〈無〉ではない。わたしは〈夜〉のなかに燃える〈火〉である。わたしは〈夜〉ではない。わたしは永遠の闘いである」。一滴の光が夜の闇に落ち、広がって、夜を飲む。そう語るロランの神は、闘いに参加する人間でもある。そしてロランは、若いときから、闘う行動人であるとともに、深いところで超然として生きてきた人であった。一九三五年六月十二日の未発表の日記にはこうある。「この〈本質〉は、わたしが交わってきたあらゆる闘いから隔絶したものである。それは、恒久的現存として、内在性として、わたしの全生涯のなかにあった」。『無に直面して生を主張する』。それ以外に空虚の不安を制圧する方法はなかった、というのである。

(成蹊大学名誉教授・仏文学)

ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から 4

村上光彦

ロマン・ロランと文通していたレーモン・ピシャル神父は、カトリック学院を卒業後、本来なら一九三九年九月にドミニコ会修道院に入ることになっていた。まさにそのときに戦争が勃発した。彼は召集され、復員後、一年遅れて修道院入りを果たした。そのあいだに、いわゆる「おかしな戦争」の時期は終わり、ドイツ軍は膠着状態を破って得意の電撃作戦を遂行し終えていた。すなわち一九四〇年五月十三日、北フランスの国境の町スタンにおいてドイツ軍戦車部隊はムーズ河を渡り、北フランスの民衆は続々と逃避行に出て平原に溢れた。まるで将棋倒しだった。ついで前回の末尾に記したように、アルデンヌでマジノ線が破られた。その半月後にはタンケルク撤退作戦が始まり、六月六日には難攻不落のはずの要塞線を突破された。それが総崩れの発端で、四日後にはフランス政府はボルドーめざして都落ちし、六月十四日のドイツ軍パリ入城が続く。そして六月十八日が、ド・ゴール將軍によるロンドンからの抵抗呼びかけの日だ。同月二十二日、独仏休戦協定が調印された。

この混乱の日々、ロランは知友の消息を待ちつづけるほかなかった。そして十月十二日、彼はソワジール・シュル・セーヌ(セーヌ・エ・オーワーズ県)のル・ソショワール修道院内のピシャル修道士にあてて、試練を抜け出て望み通り聖ドミニコの家に入れたことを慶賀している。「院内で思いを凝らしているのはさぞかし心地よいことでしょう。猶犬の群れと化した人間どもの吠え声は、その敷居際で息絶え、あなたはその内側におられるのですから」と、ロランは

書いている。この手紙（資料十六）から、敗戦後のロランの日々を窺うことができる。

わたしどもはヴェズレーから離れませんでした。逃亡してゆく人々と、そのあとを追う軍隊とが、密集した大波をなして何日も通り過ぎてゆくのを、わたしどもは高台の上から眺めました。——フランス内外の友人たちみんなとの連絡がつかなくなって、これまでにままして二人きりの暮らしに引きこもってきました。わたしは大いに思索し、また仕事をしました。自分の青少年期の回想を記した二、三冊の本と取り組んだおかげで、今日堤を破って流れてゆく奔流の水源を見直すこともでき、また宿命が辿ってきた道筋を遡ることもできました。それからわたしはベートーヴェン研究の続きに、つまり死へ向かって歩みゆく老いたる孤独者の〈告白〉——彼の最後の四重奏曲の数々——に、あらためて取りかかりました。

ロランのこの手紙は、ピシャル神父からのいまは失われた手紙への返信なのだが、ロランがそのころ妹のマドレーヌに書き送った手紙によって、神父がロランの「つづら折りの登り道」（『先駆者たち』所収のエッセー）を引用したことがわかる。神父はそのなかで、「諸国民が——予想もしていなかった血塗れの道を通して——〈ユニテ〉へ向かって歩む」と書いたのだ。諸国民が〈ユニテ〉へ向かって、血塗れの、盲目の、痛ましい歩みをつづけてゆく。ロランはそのことに同意したあと、さらにこう付け加える。「彼らは奥深い〈法則〉の鉄の手によって連れられてゆくのです。逆らって進んでいるつもりの人たちでさえ、必然的秩序の道具であり、この秩序のために働いているのです。しかし、時間も辛苦も節約してはもらえません。そうしたものを分かち与えてくれる目に見えない〈力〉があつて、それが偉大なる主君として振る舞い、彼の所有する財産を——わたしたちの生命を——ふんだんに浪費するのです。その〈目に見えない〈力〉〉なるものが大慈大悲の〈存在〉だととても考えられない。神父はこの手紙を読んで、

敬愛するロランがカトリックの信仰からかけ離れて、むしろ巨大かつ盲目的な決定論の暗い鉄則を信じているのを悟って落胆したことだろう。ただしその一方、ロランはこの手紙の追伸で、妻のマリア（ロラン夫人はロシアの公爵家に生まれたので、もともとの名はロシア風にマリヤといった。この名はフランス語化されてマリーとなる。なお、ロランは彼女をマリーシャという愛称で呼びかけもした）がギリシア正教からカトリックへと回心したと告げているのを読んで、せめてもの慰みとしたにちがいない。もっとも、ロランが一九四〇年十一月六日に妹のマドレーヌに宛てて書いた手紙（資料十七）にはこうある。「彼「ピシャル」は、とても愛情深い、いい手紙を書いてくれた。わたしを回心させようとする手紙ではない。それというのでも彼の見るころでは、わたしはいまあるがままで（神）の企てにのっとっているからだという。彼が言うには、わたしは彼の何人もの知り合い——彼自身を始めとして——が、わたしに助けられて祈ることができるようになったのだそうだ」と。じっさいには、ピシャルとその周辺の人々は、ロラン入信への期待を最後まで持ち続けていたようだ。ロランのほうでもマドレーヌに向かって、晩年に入らないうちにカトリック信者の側からこうした理解や共感が得られなかったのを残念がっている。

デュシャトレ氏の近著『あるがままのロマン・ロラン』には、ロランと彼の女性の友人たちとの関わり——ときにはソフィヤやサリーとの関係のように熱烈な愛情に溢れた——についての情報が豊富に盛り込まれている。それらの女友だちのひとりで、第一次世界大戦前に文通が始まって以来友愛で結ばれていたジャンヌ・モルティエがいる。一九四〇年十一月十七日付のマドレーヌへの手紙（資料十八）には、ジャンヌと宗教上のことがらをいろいろ話し合っ
て数々の興味深い事実を教えてもらった、とある。そこに「イエズス会は凡人間主義（キリストにおける人間性）を展開した。ド・シャルダン神父はそれのもっとも見事な例なのだ。『……』この若き教会（若いというのはいくつもの言い方というところだがね、なにしろド・シャルダン神父は六十歳なのだから）を代表するとも感じのよい存在が何人

かいるのを最近になって知ったけれど、この流派はまったくフランス的（フランス・ベルギー的）といった感じなのだ。つまり、この躍動はヴァチカン起源ではなかったのだ。デュシャトレ氏の注には、ジャンヌ・モルティエがロランにテイヤール・ド・シャルダンと話をした時期には、テイヤールはまだ一般大衆から知られていなかったとして、ロランが彼のことをド・シャルダンと呼んでいることを指摘している。ロランはこの手紙のなかで、キリスト教の新潮流において聖パウロが《精神の権威》となったことを重視して、こう述べている。「これはまったく確かなことだが、聖パウロは、彼の人柄が劇的なのもちろんとして、それとはまた別にキリスト教最大の思想家なのだ。その点については、カトリック信者たちよりさらに早く、非宗教的な歴史家たちがとうに悟っていた」。

この時期、ロランはキリスト教会内の変化に絶えず注目していた。同年十二月二日付の手紙（資料十九）で、彼はやはり妹にあててこう書き送っている。「わたしはある宗教上の動向にも目を向けている。それは精神がきわだって開かれていて、それぞれの魂が自分自身の道をとって〈神〉のもとへ赴く自由を認める気構えを見せている（これはむろんカトリシズムの内側にいる者についてはあるけれど、典礼、聖人、聖遺物とか、およそ第二義的な一切のもの）と緊密に結びつこうとはしなくなっている」。その点、かなり遠くまで進んでいるように、わたしには思える」と。もっとも、ほぼ四十年前の一九〇三年に教皇となったピオ十世が近代主義を押しとめたように、今度も教皇がこの動きに制動をかけても不思議ではないと、ロランは恐れていた。またロランの見るところでは、信者の思いは以前にはキリストに向かっていたのに、二、三十年前からじかに〈父なる神〉をめざすように変化が生じた、としている。

資料二十は、ミシェル・ド・パイユレ神父が一九四一年六月十六日にロランを訪問したさいにしたためた談話録だ。ロランはそのなかで、十二世紀にヴェズレーで第二次十字軍進発を呼びかけた聖ベルナルの話をして、この聖人が観照家と行動人とを兼ね合わせた人物だったことを強調している。また神秘家の神秘性が実生活に根ざしているという話もした。かつて文通していたブレモン神父から知ったことだが、たとえば十七世紀の神秘家たちのばあい、商人

や小市民といった普通の人が最高の神秘的生活をしていた、というのだ。話題はおのずとインドの神秘思想にも及んでゆく。ベルクソンもいくぶんかはロランに刺激されて、インド神秘思想をいくらか研究したという。クローデルの回心の話も出て、そこから一八八〇年代の《愚かな唯物論》ということばが飛び出し、《頭脳が思索を分泌する》時代だったと、彼は苦々しげに回顧する。ロランによれば、その風潮はまだ続いていた。記憶や知能といった現象は生理Ⅱ化学過程にはかならない、などという若い学者の発言を聞いたが、そういう説明をしても難問を先送りするばかりだと、彼は語っている。

資料二十一は、ルイ・ベルナル神父がロランに書き送った一九四一年八月二十一日付の手紙だ。彼はまず、ロランと出会って覚えた喜びを語る。彼は子どもころ、周囲の人たちが『戦いを超えて』の著者をしきりに非難しているのを聞いた。「長じてから、わたしはこの本を取り上げて読みました。そのさい、不正や無理解がある社会層に寄り集まっているものなのを、一種の啓示のように悟ってびっくりいたしました。彼はそれ以来、なにごとくも自分で判断しようと誓ったという。つぎに彼は、ロランが弾いて聴かせてくれた曲について、それは（はたして偶然なのか）十年前に生涯最高の感動を覚えた曲だった、と述べている。「神々しい——そしてじつに単純な——楽句が《天上から降りてきたように》嵐の荒れ狂う魂のうえに止まってくれたのです」。彼はロランが毎晩「主の祈り」を唱えると聞いて感激したと語り、これからミサの途中、パンとぶどう酒とを奉獻するさい、聖体皿にロランの全作品を載せる許しを彼に求める。

資料二十二はルイ・ベルナル神父の覚え書きだ。そこには、聖ベルナルがマインツにおいて、迫害されたユダヤ人のために発したことが書き写してある。「イスラエルの息子たちに手を触れてはいけない。また彼らに話しかけるには、ひたすら好意をもってしなくてはいけない。それというのも、彼らはメシアの骨にして肉であるのだから。もしあなたがたが彼らを痛めつけたりしたら、《主》の目の瞳を傷つける危険を冒すことになるのだ」。ナチス・ドイ

ツによるユダヤ人迫害が進行していた当時、他人に読まれる危険を冒して、中世の聖人のこの気高いことばを書き留めるとは、ロマン・ロランを敬愛する神父にふさわしいことではないか。

ロマン・ロランは、一九四一年八月二十五日付の返信（資料二十三）において、ベルナル神父の愛情のこもった申し出に感謝している。そのなかで、ロランはこうも書いている。

いつもと言ってよいほど、わたしは思想においても希望においても敗れし者「ロランには、これと同じ題名の演劇作品がある」でした。しかしわたしは、いっこう倦むことなく、希望し、そして愛および真実の掟に奉仕してまいりました。人間という名は何度となく汚されてきましたが、その名で呼ばれるのにふさわしいあらゆる人間の心に、この掟は刻み込まれています。——〈信〉〈望〉〈愛〉……。この三つの〈愛徳〉は、〈神〉に由来するとともに、〈神〉の實質そのものですし、それにわたしたちにしても、その実質の一部分なのです。どんなことがあっても、——たとえ（こう申し上げるのをお許しください！）わたしたちが〈神〉の存在を疑おうとも、——わたしたちは信じ、希望し、そして愛さなくてはならないのです。しかしわたしたちは、この神的なるものがわたしたちの内にあって、しかもそれが生ける〈神〉である、ということを疑うわけにはいきません。——それは、混沌との闘いのなかにおいて、一瞬ごとに〈神〉を再創造するものです。もろもろの世界のうちで最良なる世界、たとえいまだに存在していないとしても、たとえもろもろの存在およびもろもろの事実が加える侮辱によって絶えず否認されているようにも、やはり存在しなくてはならない世界でないとすれば、いったいかなるものが〈神〉でありましょうか！ 〈神〉とは、正義、真実、愛——〈夜〉を照らしだし、また暖めている同一の〈太陽〉が放つ三筋の光線——のための闘いのなかにおいて、〈平安〉なのです。

そう記してから、彼は神父に「わたしのために祈ってください」と呼びかける。さらに彼は、「魂がゆっくりと思いを交わすにはコルデルの穏やかな地平線が必要です。いつの日にか、あなたと並んでそこに腰を下ろしたいものです」とも書いている。ついでながら、ロランが友人のブイエ夫妻（この連載の先のほうでぜひ語りたいのだが、ロランは亡くなるわずか五日前、すなわち彼が祝った最後のキリスト降誕祭にあたり、夫妻のためにベートーヴェンのピアノ・ソナタ、作品一一一番を（「ミサ」と称して演奏した）に書き送った手紙にもコルデルの名が出てくる。そこはヴェズレーのもっとも聖なる場所なのだ。そこにあった雑木林のただなかの薬屋根には、聖ベルナルの木の十字架が据えられていた。すなわち、フランス最初のフランチェスコ会のささやかな礼拝堂が建てられた場所だったのだ。ほくにはもう、ヴェズレーを再訪する機会があるうとも思えない。だが、もしその幸運が許されるものなら、ロランが書いたように（春か秋のよく晴れた日に）そこに腰を下ろして夢想のひとつを過ごしたいものだ。この手紙の美しい結びの数行もここに訳出しておこう。

そして大胆不敵な聖人が来てくれますよう。熱誠溢れる群れをなす人々に向かって、その聖人が永遠の生命の泉をふたたび開いてくれますよう！ わたしたちが待望しているという、まさにそのことが、彼を告知し、また彼を生み出すのです。たしかです、彼は来るでしょう！ 彼は途上にあります。彼の先駆けを務めた人々に、わたしはすでにひとりならず出会っております。わたしがこの世にいなくなっても、あなたは生きておられるのですから、彼がやってきたら、わたしの熱烈な歓迎の挨拶を、また彼の到来に（居合わせなかった）無念さを、彼にお伝えください。

（成蹊大学名誉教授・仏文学）

〈没後二十年宮本正清を偲ぶ①〉

ロマン・ロラン随想

宮本正清

一九二四年だったろうか、シャルル・ヴィルドラックが、山王台上の、すばらしい見晴しの日仏会館で、ヴェルレーヌの話をしたのは。講演が終った後、アリストクラティックな会場のざわめきの中で、私の詩友前田鉄之助君が、片山敏彦君に紹介してくれた。片山の名は、早くから私は知っていた。倉田百三が主宰していた「生活者」という雑誌にシュテファン・ツヴァイクの「ロマン・ロラン」を片山が訳していたからである。それから、神田のフランス書専門の三友社に寄ると片山という名札のついた新着書がよく棚にみられた。時には私の注文書と並んでいたりした。しかし、面識をえたのは、今云ったように、ヴィルドラックの来朝の折だった。その時片山は、ロマン・ロランの友の会に君も出ないかと誘ってくれた。そして最初にその会合に私が出席したのは、荻窪の片山の家だったのか、それとも、すぐ近くに住んでいた上田秋夫君の家だったか、記憶は少し明確を欠くが、私を魅惑すると同時に少し怖気させたのは、その会のユニークな雰囲気だった。まづ、その集いのメンバーが、高村光太郎さんがいちばんの長老で、おのずから、中心をなしていた。尾崎喜八、上田秋夫、吉田泰司の諸君、みな詩人だった。パリにいる彫刻家高田博厚もその一人だった。みんな自作一篇を朗読した。音楽を聴いた。多分ベートーヴェンだったと思う。ロランを語り、音楽を聴き美術を論じたが、はじめ私を驚かしたのは、その会

の空気だった。温かい親しみがありませんながら、馴れ馴れしく俗に墮することなく、尊敬と愛情を調和した一種の中心があることを感じた。文学的会合とはどこか根底でちがっていた。ふしぎな印象を、新入者の私は感じた。この「ふしぎ」の謎は後になってとけた。それはロマン・ロランだった。それからほとんど三十年をへて、戦後の日本に、ロマン・ロランの友の会や研究会が各地に生れ、或は定期的な、或は臨時に研究会や講演会が開かれ、私も出席する折が多いが、今日、いたるところで私が感ずるのは、かつて私を驚かしたその「空気」である。そしてその空気とは何であるのか？ それはロランにたいする一種の敬虔な念である。数多い思い出の中からその一例をあげよう。戦後、私たちが、甦生と革新の精神に燃えて、日本にもロマン・ロランの友の会をつくり、ロラン全集がいよいよ発足した初期であった。兵藤正之助君が中心になって、ロランの戯曲「敗れし人々」を上演したことがあった。戦後のあらゆる不備な条件のもとに、京都の関西日仏学館で催された。もちろん演出は一切がほとんど素人ばかりが担当し、演技はまた京都の各大学の演劇部のメンバーによってなされたので、いわばにわかには結ばれた寄り合い所帯であった。それにもかかわらず、配役その他デリケートなところまで精神的な調和と協力が外面的な雑多を統一した。ステージは芝居をやるにはあまりにも狭かった。舞台装置やコスチュームにかけるべき経費の出どころはなかった。こうした物質的不足をみんなの熱意が補った。そればかりではない。観客の一致した気持がまたそれに統一的な雰囲気完成了した。その一例として忘れえないのは、戦後のことで、中途で停電して、長い間待たなければならなかった。それにもかかわらず、観客は誰ひとり騒ぎもせず、不平を云うものもなく、肅然として待っていた。もちろん、若者は完全というわけではなかったが、しかし、幾時間かの間、大勢の人々が、ロラン的な一つの高い精神に浸りえたという意味では、大きな成功ではなかったか。同様の経験がその後いくたびとなく体験された。一昨年、ロランの十年祭を記念して私たちは、大阪朝日新聞、京都日仏学館、和歌山商工会議所で、記念講演会を行い、京都と和歌山ではロラン関係の図書展覧会も催した。それら

の事業のために私たちは少しの経費ももたなかったし、持つ必要もなかった。すべての人が自発的によるこんで参加し、協力し、奔走した。そして、どの会場でも、緊張と、敬虔な感激が聴衆の顔を照らしていた。この現象はそれを催した人々を驚かせたばかりでなく、来会者のすべてを打った。しかし、芸術家——文学作家にたいする読者のこうした崇敬の念——もっと限定していうならば、ロマン・ロランにたいする敬愛、感謝の念は日本に特有のものであり、いわば、純文学の埒を少し外れた趣味をもつ一部の読者層の気持を反映するものであろうか？

そうではないが、この問題をここで論証することはこの随想の目的ではないから、割愛せざるをえないが、ただ、一言するならば、世界のいたるところで、私は同様のことを体験し、ひとり文学に関してのみならず、人生について、人間そのものについて、ロラン的な精神の力の意義を知りえたことである。それは何か？ ロランのすべての作品をつらぬいて流れるもの、そのためにロラン自身が生き、戦い、創造したもの、クリストフやアンネットを生かしているものである。それは、幾つかの単語によって、抽象化し、哲学化することをさしひかえたものであり、しかも、ロランの数ページを読むことによって、単純に、明快に、しかも深く、誰でも感じうる純粹な魂を保存している人々、いわゆる文学かぶれによって光を光と見ることができない種類の人々は別だが——感じうる、さとりうる真理である。つまり、流れる水のように生きた生命の力そのものである。

一九五一年一月、はじめて私がバリのロマン・ロラン研究所で研究をはじめたときに、ロラン夫人は私を、アメリカ人に紹介して、「あなた方は憎み合わないでしょうね」といった。私も笑いながら、「ロマン・ロランを愛するのですから」

友情はたちまち私たちを結んだ。カナダの教授アメリカ人トレンス氏、シカゴの教授スタール氏、インドのバルセ氏、ロンドンのヘンリー氏、ドイツのハイヤー氏、フランスのベリユース氏、……私たちは揃ってバルセ氏の下宿に立ち寄り、バルセ君の手料理で昼食をとにしたこともあった。そして、私たちは互いに信頼と敬意に

みちた友情をお互いに感じていた。ロランの友情と私たちはそれを呼んだ。ロランをほんとうに愛するもの同士の間、裏切りや嫉妬や反目はあり得ないということを感じてきた。なぜなら私たちはみな一つの小さい研究室で、朝から夕方まで、ロランが親しい友に書いた無数の書簡を通じて、彼のもっとも内的な声にききとれてきたからである。ひとたびそこに入ると、一種の精神的浄めを感じたのは私ひとりではなかった。

ロランが友情と呼んだもの、それなしには生きる意義すら失われると彼がいったものは、友人や親しい人々にたいする親切とか愛情とかいうものではない。それはむしろ「愛」と単純に呼ぶべきもの、もっとも無私なるもの、返しを、報いを要求しない、その必要すらもたない愛する力である。そして、それはロランにとっては生命そのものの姿、生命の発露に他ならぬのである。従って、ロランのアミティエを、ありふれた社交関係や、一通りの親切や、多少とも実生活の利害とつながった感情の動きと解するものにとつては、ロランの精神の高さも深さもつかないことはできない。クリストフ、アンネット、クレランボーたちの魂にふれた人々にとつては、こうした解説めいたことは不要であろう。

さて、一九二四年におそらく日本で最初に、ロマン・ロランを大学の卒業論文にあつかつてこのかた、私は、三十二年の歳月をロランとともに生きてきた。そして、日本も政治的に、社会的に幾多の変化推移をけみし、文学の流行も次から次へと目まぐるしく変わり移つた。しかし、それらの流行の波の外に、ロランの精神の風土に根をおろした魂たちは、地上の嵐に根こぎにされることもなく、世界の隅々にある、自己の内心に忠実であつた人々とともに、生きてきた。

そして、今やその数は、文壇や一般読書界の風潮とは関係なく、しかし、真の意味においては、大きな時代の動揺と風波に呼応しつつ、その数をましてきた。一九五五年六月はじめに、ふとある興味から、戦後ロマン・ロ

ラン全集として刊行された私の訳の部数を知ることができた。それは五十三万だった。この数字は私を驚かした。私を慰めた。私を励ました。つたない私の訳を親しく読んでくれた人々の実数はそれをはるかに越えているだろう。何故なら、ロランを買い求めて、読まずに打ちやる人は比較的稀であり、彼に魅せられた人々が、愛読書を知友に貸し与えて一読をすすめないこともまた稀だからである。しかし、私の欲びや希望は決して数字が代表する量的なもののみつながっているのではない。

近年、日本の大学で、フランス文学の卒業論文として、ロマン・ロランを研究題目に選ぶ青年の数もとみに増してきた。こうした事情は、私をして、ロマン・ロラン研究所 Centre d'Etudes R.R. de の設立を夢見させ、多少学問的機関、日本ロマン・ロマンの友の会の姉妹として、微力ながら後進の研究を授けることができたと希望し、企画している。何故なら、ロランの数多い戯曲、小説、伝記、研究、エッセなどを綿密に読み、詳細に知り、深く理解しようとするときに、誰しもおどろき、当惑し、また同時にいっそう魅惑をおぼえることは、ロランの多様性であり、広さであり、深さである。自我の世界に閉じこもって、その内面に掘った穴のなかに、蚕のように閉じこもった作家とロマン・ロランとの大きな距たりを私たちは何よりも感じずにいられない。そうした掘り下げ方を軽んじたり、その芸術的価値を無視したりすることなしに、私たちはロランの精神的な力を道徳的な輝きを認めずにはいられない。そして、それが、人類社会全体を押しすすめつつある時代の動き、歩みと、必然的な、不可避的な、内面的な関係を有する意味において、ロランは、他の多くの名人肌の芸術家、巧みな芸人、達者な職人のカテゴリーに入れうる比の、いわゆる専門的「作家」、告白とフィクションの世界に沈潜耽溺しうる文学者たちとの、大きな相違を、少なくとも、今日の若い世代の一部分は知っているにちがいない。彼らは、ロランを彼らの立場から要求し、理解し、強調しようとするにちがいない。それが必ずしも、ロランのありのままの姿ではないにしても、「これが真のロランである。あなたのはにせものロランだ！」と誰が云いえよう。結

局、めいめいが、ロランを通じて、自分の姿を描き、己が精神の限界を示すにすぎないではないか。

私は若い世代が、若い情熱をかたむけて、「自分のロラン」を完成し、主張することにも大きな期待をかけている。ロラン自身が云ったように、めいめいがロランについて語ることは自由である。しかしロランの名において、めいめいが勝手に語ることをロランは決して許さなかった。

一九五六年三月十二日、未整理原稿から

金澤武藏・片山敬三・織山尊道・石上貞平(元)著
人間・藝術・政治
大塚久雄著 近代西欧経済史論
橋山力著 近世のジャン・クリストフ
宮本正徳著 魅せられたる魂(二)
宮本正徳著 思想と現実
坂田鶴堂著 房書
256の第本区京交都京

1950年の新聞広告から

四国の山間の小学校から

宮本正清は、ロマン・ロランの翻訳・研究のみならず、詩人としての創作活動も盛んであったが、まさか小学校の校歌の作詞を手掛けていたとは、当研究所関係者にも初耳だった。

一昨年の秋、宮本の卒業した高知県の奈路小学校に通うお子さんを持つ知人から、同校の校歌の作詞者の氏名が「宮本正清」であることを聞かされた。早速同校の北村初江校長に問い合わせたところ、一本のビデオテープと共に、次のようなお手紙を頂いた。

「……奈路の大先輩、世界に誇れる宮本正清先生の作詞によります本校の校歌、大事にうたわせていただいております。本校養護教諭が素人ながら、休日に奈路の山々の景色を撮ったり、写真を入れたりしながらビデオに収めました。……」

そのビデオには、豊かな自然に包まれた奈路の風景と共に、竹を細工して作った楽器を演奏しながら校歌を合唱する小学生たちの活き活きした姿が映っていた。ロランを敬愛した宮本らしい温かい言葉が、純真な子供たちの声と見事に調和して、私たちの心に響いた。

新しい「出会い」であり、また別の意味では「再会」ともいえる、このような素敵な機会を与えて下さったすべての方々に、この場をかりて御礼申し上げます。

奈路小学校は、高知県南国市北部の山間にある、全校生徒数三十余名の小さな学校。周囲は豊かな山林におおわれ、水田が帯状に広がり、特産物のタケノコは有名。教育方針に「地域あつての学校」「学校あつての地域」を掲げる同校は、小規模学校の特性を活かし、地域住民と一致協力したきめ細かな指導を展開、平成十三年度は県から坂本教育賞を受賞した。また、その熱意は市の住宅政策をも動かし、地域初の市営住宅の建設にこぎつけ、過疎化に伴い減少を続けていた児童数も、近年回復しつつある。宮本正清は明治四十四年に同校を卒業。

(編集部 M・K)

校歌

宮本正清 作詞 村田忠雄 作曲

一 われらがきよき 奈路川の

流れにうかぶ ささ舟や

ゆくてはひろき 人生の

わだつみさして こぎゆかん

三 幼き友よ いざさらば

学びの庭に いそしまん

野にさく花と 清くして

うたう小鳥と 楽しまん

二 わが山里に 吹きいでし

色香も清き 山ざくら

花散りゆかば みどりのに

われらも豊かに みのりなん

四 わがよき友よ 来れいざ

この山里に つちかいし

われらの徳と 力もて

まことの日本 うちたてん

〈没後二十年宮本正清を偲ぶ③〉

追悼朗読会に参加して

能 田 由紀子

二〇〇二年十一月十六日、ロマン・ロラン研究所で宮本正清先生の没後二十年の追悼朗読会が開かれました。ロマン・ロランの翻訳者であるとともに、詩人でもあった宮本先生の作品を朗読する会で、「焼き殺されたいとし子らへ」と『生命の歌』から数編の詩が読まれました。その中で私の印象に残った作品が、詩集『生命の歌』のなかの「凧」です。

〔凧〕

凧の中に孤独なる一つの沼

私の心はここに静か――

知られもせず

忘れられもしない

求めもせず

拒みもしない

肯定もなく否定もなく

誇りもなく恥もなく

ただ自ずからに充ち堪える刹那の私

優越もなく劣敗もない

もはや私には風もなく波もなく

ただ存在の光にまかされた

嬰兒の微笑にもにたかがやきが

内ともなく外ともなくたゆたっている

この詩には何の理由も示されることなく警察へ強制連行され拷問を受け、敗戦によって解放されるという経験をされた宮本先生がもっておられた心の真の静けさが表されています。外界に生じる様々な現象と、それに接する自分自身を、澄みきった心で見つめる精神、自己をやみくもに主張したり他人に理解を求めたりしない孤高の精神をもってこそ、黙せる生活者として生きてゆく人々の悲しみをいとおしみ、理解することができるとはなんでしょうか。そして、同じ詩の中で、その境地に達することができず自己にとらわれている者に対しては、

悔恨の小道に戻ってきたまたまた漂泊者よ

かまうことはない

今日もまた恥じるがよい、怒るがよい、そして

またゆるして、おしまいにはそっと呟くがよい

と詩人は語りかけます。そしてその語りかけが

「ほんとに自分は愛していた」と

不幸と悲しみに無駄はないのだ

裏切られた愛の悲憤を持たない心が

どうして知ろう、味わおう

と続くとき、私の中に、アンネットの言葉がきこえてきたのです。

「私はいっさいをとるのです、自分が獲得した一切のものも、獲得しなかった一切のものも、一切の自分の運命を、堅実なもの、無茶なもの。一切が真実です、堅実なもの、無茶なもの。人は思い違いはします、それが人生です……しかし愛するということは、全然思い違いをすることではないのです……次第に年は取りかけても、私は皺のない心を持っているのです……そして、その心はたとえ苦しんだにしても、愛したことを幸福に思っているのです……」と。

翻訳者であり詩人でもある宮本先生の中にある「静」と、アンネットの言葉として表現された原作者ロマン・ロランの中の本質的な生命力である力強い「動」とが、人類への愛というところで共鳴します。それこそが訳本「魅せられたる魂」ほかの翻訳をうみだした源だったのではないでしょうか。

(評議員)

ロマン・ロランの後継者たち

蜷川 讓

私にとって京都というのは後ほどお話しますが特別に親しみをもって居る街でありまして、今日はその京都で皆さまにお話をする事になったことをとても嬉しく思っています。

さて、「ロマン・ロランの後継者たち」というのは非常に大きな命題でして、ロマン・ロランに傾倒している人たちはあるいはみんな各々後継者だと思っているかも知れませんが、特にそれを編集したり翻訳したり解説したりする人たちの中には、われこそは後継者だと思っている人もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。よく考えてみますと本当に後継者と呼ぶにふさわしいのは非常に少数ではないかと思えます。

少し別の見方から申しますとロマン・ロランの後継者というのは、大学や研究機関などのある意味で組織された場を通して正統的に教育されて受け継いだ人々と、そういうことに全然関係なく、ただ自分がロマン・ロランに対してあるきっかけから非常に深く心酔して、その精神を受け継ぎたいと思っている人もたくさんいると思われれます。そういう意味で後者に属する人たちの中にも真の後継者として相応しい人がいるのではないかと思えます。

きょう最初に、私はそういう人たちの一人として、ロマン・ロランとジャン・ジョレスを慕って滞仏四十年の椎名其二という人の話をしようと思っただけですが、その人は組織や系列なんかに登場する「ロマン・ロランの影響を受けた人」ではないんです。全くそうではなくて、最初この人のことを知りましたのは、私が初めてパリに留学した

五十年近く前のことですから、その半年ほど前にデンマークから招待されて留学しておりまして、北欧デンマークから鉄道で、ジャン・クリストフと同じくパリの北駅に着きました。当時は日本人が非常に少なく、日本人が泊まるどころといえ、パリ十四区のいちばん端にある日本人会館ぐらいいしかなかったものですから、先ずそこに入つてしばらく滞在していた時でした。そこで私の先輩にあたる佐波甫という方から「君はなぜフランスに来たのか」と訊かれまして「実は私はロマン・ロランを少し調べたいと思つてパリに来ました」と言いましたら、驚いたことに「自分の先生はロマン・ロランを慕つてフランスに四十年間住んでいる。それは椎名其二という先生だけれど、君も是非逢わなければいけませんね」とおっしゃるので、

椎名其二という名は聞いたことはあつたのですが、現実にパリにいらつしやるとは知らなくてびっくりしました。で、その人が教えてくれたアドレスをたよりに会いに行きました。パリにはとても古い建物が多いんですがその中でも最も古い感じのマビヨン街、なんでも昔は馬小屋だつたところを改造したという地上がレストラン、地下が倉庫になつていてその地下の一角に住んでおられるんです。行つてみますと満足なドアというものがなくて、何か木戸みたいなのがあつてノックしましたら、確かに日本人らしき先生が出てこられました。そこで「これこれの者ですが、実は佐波甫という方に『私がロマン・ロランを勉強している』と言いましたらぜひ椎名先生に会うようにと言われて会いに来ました」と言いますと、少し笑みをもらされて「まあ、お入りなさい」と中へ通されました。だけど大体そんな先生ですからあまり人には会いたがらない「自分の所に会いに来て何も得るところありませんよ」とか「それにして君、デンマークあたりからわざわざこんな所へ来ることもなかったのに」などとひとくさり皮肉っぽい言い方をされたりして、後になって判つたことですがそういう皮肉を言つたり相手をからかったりするのには随分機嫌の良い時だそうで、ともかくロマン・ロランが介在していたために非常に機嫌良く応対して下さつたのです。

その椎名先生は秋田県角館の出身で早稲田に入つたのですが途中でやめられてアメリカのミズリー州立大学に学び

ます。ちょうど第一次世界大戦の頃ですが、そこでロマン・ロランの戦争に反対する主張や、ジャン・ジョレス（一八五九—一九一四、フランスの社会党首、歴史家・哲学者、ユマニテ紙を創刊、反戦運動を展開し暗殺された）の記事に出会い、啓発されてフランスに渡ります。

フランスではボルドーの奥のルクリュールという地理学者の屋敷で休養と手伝いをしながらフランス語を学び、やがて大きな農場で農業の実践をしますが、その農場の女主人ルイズ・クリュビーという方が大へんなロマン・ロラン信奉者で、椎名先生のことをロマン・ロランに手紙で知らせます。

ところがその後、椎名さんは戦争で夫を亡くした女性と駆け落ちをしたことから大へんな面倒な運命を辿り、その奥さんのパスポートを得るためにベルギーを経由して辛うじて日本に帰ってきます。

そして故郷の秋田で彼の農業実践をしながら一つの理想的な村づくりをしようと取り組みますが、洪水にあって田畑が全部流されてしまい計画は見事に失敗してしまいます。

次に早大にフランス文学科ができたのを機に、乞われて幾年かの間早稲田で教鞭を執り、この間にバルザックやその他のいろいろな翻訳をなします。なにより有名なのはファールブルの昆虫記で、大杉栄が第一巻を訳した後、殺されてしまったので第二巻以後椎名さんが引き継いで訳をされます。その時期は第一次大戦後の混乱の時代で椎名さんも検束されて牢に入れられたりします。また椎名さんは市民大学なども開くのですが、いろんな講座を開くと常に官憲がつきまとう。ついにこんな自由のない国ではどうしようもないと考えたので、再び奥さんを連れてフランスに渡ります。

しかしその頃のフランスでは日本人が仕事をして稼ぐことは禁じられていたため、生活は困難をきわめます。

やがて第二次大戦に入り椎名さんは少数の日本人の一人として留まりますが、そのためにフランスから敵国人という事で迫害をうけて投獄されます。幸いなことに捕まる前の仕事は大使館の海軍駐在武官のいる部署で、大戦中フ

ランス政府がバリからヴィシーに移りますが、そのとき椎名さんは武官の了解を得て、何回もフランス人に大事な電話を貸したのですね。それが実はレジスタンス運動に役立つわけですけども、そういう功績を知ったフランスの人たちの努力で釈放されたという逸話もあります。

やがて戦争が終わり他国に収容されていたユダヤ人たちがどっと帰ってきます。椎名さんが住んでいた家はユダヤ人の持家だったために明け渡さなければならなくなり、八方さがしたあげく先程お話しした古ぼけたレストランの地下倉庫の一角に十年間住まわれていた、そしてその間に私がお会いしたというわけです。

長いお話をしましたが、私が識り合った椎名さんは勿論自分ではロマン・ロランの後継者などとは思ってもおられなかったでしょう。ただフランス思想、文学の根幹をよく研究されてロランに深く心酔しておられたことは確かです。あの地下の住まいも最後はたたむことになって荷物を整理しているとき、後年は製本業をやっておられたものですから革張りの立派な装丁をしたルソー全集、ヴォルテール全集等々数千冊もある中から「ロマン・ロランの著作で大切なものだけ君にこれをあげよう」と言ってロランの『ペートーヴェン研究』の全八巻その他を私に下さいました。そのことでなおのこと彼が最後までロマン・ロランに対して強い関心をもっておられたことを印象づけられました。

地下の住まいを引き払った後、椎名先生はノートルダム寺院前の身寄りのない人のための病院に長くおられました。頼るところはなかったようです。私はその間に船で日本へ帰って参りましたが、スエズ運河が動乱で通れないものですからアフリカ回りで四十日かかって、途中各地の港に寄港する度に椎名先生からの手紙が届けられました。驚きとともに先生の望郷の念を強く感じました。そこで先生を日本に呼び戻すために先生と関わりの深かった人たちが協力し合って旅費を集めました、ふたたび帰国されます。すると暫くの間は、ジャーナリズムが珍しさも手伝っている執筆を頼み、記事が連載されたりしますが、少し時期が過ぎると見向きもされなくなる。フランス語の教室を開いてもたまたま条件の悪い場所だったものですから生徒が一人も来ない。やがて周囲の誰かがそろそろ養老院へとす

すめるような話を出される。しかし私は自由人として生き抜いた椎名先生の最後の行き場所が養老院などでは決まらないと思っていました。

その後、野見山暁治が描いたデッサンを売ったり、ラクロワの『出世をしない秘訣』という本がベストセラーになりたりして渡航費が出来まして、今度はご自身のお兄さんの孫娘を杖に、三たびフランスに渡られ、パリから二百キロほど離れたところに住まわれましたが、二年ほど後にパリの病院で亡くなられました。世間には身寄りもなく貧困の中での哀れな死と言う人がありますが、そうではなくて最期まで何ものにも束縛されない思想、哲学をつらぬき根底にロマン・ロランの思想が脈々と息づいた、自由人として生きた素晴らしい人生であったと私は思います。

さて、もう一つの話になりますが、最初お話ししましたバリ日本人館に到着して直ぐにロラン夫人に手紙を出しておきました処、暫くしてロラン夫人の使いとしてネデルコヴィッチという逞しい青年がやってきまして、翌朝ロラン夫人の住むモンパルナス通り八九番地に案内してくれました。彼はストラスブル大学に籍を置くユーゴースラヴィアからの留学生でしたが「ロランとステファン・ツヴァイク」という論文の資料集めのために、ロランの資料室に通っているところでした。

彼はロラン夫人から全幅の信頼を寄せられていまして、夫人は彼のことを「レジスタンスの闘士ですよ」と私に紹介してくれた闘志溢れる好青年でした。彼はまた夫人と一緒に私を映画や音楽会、お茶やパーティーなどに誘ってくれたとても気さくな青年でした。これが一九五四年頃のことでした。

ところが、そんなネデルコヴィッチ君が一九七〇年になってロラン夫人から告訴されるという降って湧いた災難としか言いようのない事態が起こったのです。と言いますのは、彼がまとめた前述の「ロランとステファン・ツヴァイク」の博士論文がフランスの出版社から刊行されまして夫人の手許に送られてきました。それを読んだロラン夫人はその資料は博士論文のためだけにコピーを許したもので公刊することはまかりならぬと《著作権》をたてに出版禁止

の訴えを、それも急速審理の判決の要求をしたのです。しかしそれは急速審理の対象ではないとされたために、夫人はさらに執拗に高等裁判所に上申したのです。

ロラン夫人の主張にも一理あることは認めます。しかし、一体この件は裁判に持ち込まれるほどの事件だったのだろうかという疑問があります。すなわち、ネデルコヴィッチ君が二十年近く前に自分の博士論文のために、ロランの原資料を求めて研究しまとめた論文が年を経て出版された。しかしその時点はおろか五十年にならうとする現在に至っても問題の『ロランとツヴァイク往復書簡集』は出版されていないのです。もし夫人の主張を遵守するならば、公刊されていない資料を一生懸命研究して論文を書いても、公に発表できないこととなります。また、世界の多くの学者、研究者、ロラン愛好者達が待ち望んでいるその往復書簡集を、出版するに十分な時間的、経済的その他諸々の条件が整っていたにも拘わらず出版しなかったロラン夫人の方に非はないのかという疑問であります。

まあ、今更言っても仕方ないことではありますが、ロランは最晩年にスイスのヴォ州で亡命ロシア人であった秘書の彼女が外国人長期滞在禁止令にふれるのを避けるために夫人として入籍したのです。その夫人がロランの死後、世界中から集まる印税などで裕福な生活をして、スイスのヴィルヌーヴ山荘を購入したり、ヴェズレーにジャン・クリストフセンターを建てたり、旧ソ連から息子の嫁を招待したりと、かなり優雅な暮らしをしていたのです。

そんな彼女がユーゴスラヴィアの学者、それも若い頃からの熱心なロランの傾倒者で、あんなに親しく信頼し合っていた同志だったのに訴訟までしなければならぬとは、ロランが生きていてそれを知ったら、どれほど憤り悲しんだことであろうかと思えます。

ところがこの裁判以来、公開禁止となっている筈のネデルコヴィッチの幻の書が、その後日本の第三次ロマン・ロラン全集第三八巻に堂々と訳出されています。そしてそれ以後のロランとツヴァイクに関する文献や引用がみなネデルコヴィッチの文書を出自にしているのですね。そういう事実を見ますと、ロラン夫人が強硬に訴えた裁判の判決文

も、日本の出版物にまでブレイキが利かなかったようです。

さて最初にも申しましたようにロマン・ロランの後継者という言葉はいろいろな評論や雑誌をみると必ずいくつか出てきます。しかし謙虚にロランの後継者というに足りる人は、私の概念から言うると本当に少数です。

日本ではあまり知られていませんが、フランスでは非常に有名な作家でジャン・リシャル・ブロック（一八八四—一九四七、ユダヤ系、コミュニストとして活躍、小説「：会社」、評論「演劇の運命」、戯曲「ツーロン港」など）という人がいます。私はこの人あたりがかなりロランの後継者といってもよい弟子だろうと思っています。そのように真の後継者ということで考えるときわめて少ないのですが、しかし友人と言える人はたくさんいます。

後継者、友人と言ったついでに、常々私の心にひっかかっていることを申しますと、日本ではしばしば、言葉の持つ真の意味を正しく理解せずに、卑俗な流行り言葉などを短絡的に使って日本語を乱してしまう傾向があります。

例えば、ある解説者がベートーヴェンとかロランに影響を与えた女性の話をするとき、一種のウケを狙うのでしうか、ベートーヴェンやロランが女にもてたか、もてなかったかと言うような次元の低い話に平然としてしまふ。またある有名なNHKのアナウンサーが、心くばりというべきことを全部、気くばりという言葉を使って流行らせたために、心くばりという語が廃れてしまった。気くばりというのは心くばりよりはるかに軽い意味で、深みが全然違うということが分かっていない。これは重大なことで、皆さんもどうか厳密に考えて自分自身の言葉を流行語などに惑わされることなく、真髓を伝える言葉を使うということに心をくばっていただきたいのです。このことはロマン・ロランの精神を理解する上でも（もちろんロランに限ったことではありませんが）非常に大切です。これは私が日ごろとても気になっていることなので一言つけ加えてお話ししました。

最後に、今度「パリの宿」（麗澤大学出版会刊）という本を発刊します。今日お話しました話の詳細はこの本にも載せています。またこの本の題名にした由緒あるホテルの主人が大変な日本最良の方で日本女性と結婚して、京都・

奈良にも何度も来ていましたが、数年前に亡くなられました。

その人のことを書くために、私もここ数年、幾度も京都や奈良に足を運び、当地の様々な魅力を感じていた矢先に、今回の京都での講演の話がありましたので、今日は特別の親しみと喜びを感じてお話をさせて頂きました。

この本には、そのホテルと主人のステイヴおよびその周辺に関する章、日仏文化交流史上のロマン・ロランとアンドレ・マルローの章、それにフランス陶芸紀行の章を合わせて一冊にまとめました。どうか関心をお持ちの方は是非この本を読んでいただきたいと思います。

(元日本福祉大学教授、早大講師、フランス文学)

(二〇〇二年十一月十一日、日本イタリアヤ会館、ロマン・ロランセミナー講演会から)

パリから——「ロマン・ロランの友の会」の人たちと

宮本 エイ子

私たちの研究所に隣接する半鐘山の開発問題は、「ユニテ」でご報告しておりますが、現在は係争中です。京都市、業者、住民間の折衝はほとんどなく、半鐘山自身も昨年夏に半ば崩されたまま、問題は閉塞状況にあるといえましょう。

私たち近隣住民は京都市の「開発許可取り消し」を求めて、市長を相手に昨年四月、行政訴訟を起こしました。私も原告団二十七人のうちの一人として参加していますが、法的には極めて低い勝率だそうです。

開発審査会へ審査請求している頃から、保全は法的に困難と聴いていましたので、あらゆる角度から検討し直しました。半鐘山は、ユネスコの世界遺産に登録されている銀閣寺の周辺（バッファゾーン）にあり、その重要

性に注目していたのです。世界遺産レベルで保存すべき景観と位置付けました。

フランスの友人たちの薦めもあって、住民有志でユネスコ事務局長・松浦晃一郎氏へ、昨年の一月に思い切った手紙を書きました。五月になって、世界遺産センター所長・フランシス・バンドリン氏からご返信をいただきました。「半鐘山開発問題」について、日本政府へ調査依頼した旨をご回答下さったうえ、文化遺産に対する私たちの関心への深さに謝意が述べられていました。

また、フランス人の友人は、京都の景観危機を世界の新聞の良心といわれる、ル・モンド紙に訴えました。同紙上で、東京都心の開発される摩天楼のようなビル群のおぞましさが集集され（二〇〇二・五・十一）、その中で

「京都よ、お前もか！」という調子で、半鐘山の破壊が掲載されたではありませんか。

「半鐘山と北白川を守る会」でも、世界的潮流である自然環境保護の視点から国際社会へ訴えていく気運が一気に盛りあがっていきました。

住民会議で、弁護団長の飯田昭氏と事務局長玉村匠氏のふたりの弁護士が、パリに本部のあるユネスコへ行くことに決まったのです。半鐘山「保全勧告」を、京都市に対して出してもらったためです。住民の同行がないのは、「刺身のつま」のないようなもので、私は、会とは別に個人として同行することを決断しました。

それというのも、私はフランスへ行きたいという思いを常に持っているからです。ロマン・ロランの理解者マルセル・デルボー夫人を昨年失い、私はお墓参りをし、その哀しみをご家族と分かち合いたいと思っております。

同じ時期、「ロマン・ロランの友の会」（本部・ブレーブ）の会長、ドイツ女性のマリア・キーディング博士も亡くなられて、新しい会長にフランス人、マリチヌ・リ

エジョワ女史が就任されました。私は新旧会長にお会いしたことはありませんが、いずれも親しく文通してきています。

新会長のリエジョワ女史が、私のフランス行きを知って、早速、「ロマン・ロランの出身校、高等師範学校（エコール・ノルマル）で歓迎会をしたいから、フランスの旅程を知らせよ」というeメールを寄せて下さいました。

さて、パリではユネスコへの要請を終えると、忙しい弁護士さんたちは、慌ただしく帰国されました。ユネスコ関係は思いのほか成果をあげましたので、開発問題については別稿で書きたいと思います。

デルボー夫人は、一九九〇年に私たちが「ロマン・ロランの足跡を訪ねる旅」をした折、ロランの生誕地クラムシーと終焉地ヴェズレーヤ、墓地のあるブレーヴ地区での民宿のお世話や歓迎行事のすべての段取りをして下さった方です。現地で受け入れの労を執って下さる方が

いればこそ、旅がスムーズに豊潤になるというものです。彼女は、ロラン生誕地のクラムシーとお墓のあるプレーグの途中に位置するドルヌシーにセカンドハウスを持ち、地域の議員を永くしておられました。昨年九月、夫人は、そこで倒れ、クラムシーの病院へ運ばれましたが、一週間後に不帰の客となりました。

夫人に頼り切っていたご主人のロジェ・デルボー氏は八十歳で、ベースメーカーの必要なお身体で、深い悲しみからなかなか立ち直れないようでした。近所に一人息子のミッシェル夫妻がおられますが、そこでもふたりの子どもたち、孫になります。すでに独立しています。私をはじめお孫さんに会った時は、まだ羞にかみやの少年で、そのギョームはすでに二十六歳に、姉のアレキシアは、目を見張るほど美しく、別のところでボーイフレンドと暮らしています。その彼まで来て、一家の中心だった女主人を失った家に、総勢六人の家族が揃いました。デルボー家は夫人がいられるときと同様、彼らの歓びとして一家あげて私を迎えてくれました。アレキシアは私の耳元で囁くのです。「祖父は一日に二回くらいお

墓に参って、一時はどうなるかと思った」と。

デルボー家のお墓は地下二層になっていて、ご遺体は地上に近いところでそのまま眠っていられるそうです。私は日本式で生花一本を手向けました。お墓の周辺は、観葉植物や花の鉢植えで見事に飾られていました。「毎日、鉢に水をやり、午前午後も来ました」と、ご主人は涙を流しながら、私の手をぎゅっと握りしめながらおっしゃいました。彼はお墓にひざまずき、なかなか離れようとしませんでした。

「妻は、あなたやあなたの日本人の友人たちを、とても愛していました」と、ご主人が、ポツリといわれると、あとは言葉になりません。夫人は、元教師で、ロラン関係の新旧資料を発見すると、その度に送って下さったものです。その方が、もういられないと思うだけで、かけがえのない方を失った喪失感を私はしょっぱい涙で味わうのでした。

一昨年パリでお会いしたとき、母親代わりの叔母様の遺品である木製の宝石箱を、私にそっと下さいました。「今度はいつ来られますか」と、寂しげに言われたその

お顔が今また目の前に現れます。何か言い足りないようなその様子が……。彼女の形見になることを、その時予感していたのかもしれない。

一方、「ロマン・ロランの友の会」の新会長リエジョワ女史主催で、九月十八日、エコール・ノルマルの教室を会場に日本から来た私の歓迎会を催してくれました。

ロランはフランス最高学府のエリート校、エコール・ノルマル入試に二度失敗しながらも、三度目に合格しました。その学生生活は、『ユルム街の僧院』として、一八八六年から一八八九年の日記になって出版されているのはご承知の通りです。

誰もが体験する青春の学生生活ですが、人類愛的精神の巨人となる萌芽がすでに随所に見受けられます。宇宙のあらゆる要素に反応する瑞々しい知的な魂のほとばしりが、細密画を見るように記されています。清新な知的刺激を受けます。音楽、美術、歴史、友情、教師の言動の個人的なことに止まらず、文化、社会を厳しく観察している時代の証言記録でもありましょう。

私はこれまで幾度となくユルム街を通りながら、ロランが「僧院」と名付けた学舎を、高い鉄柵の外側からカメラを向けることしか叶わなかったのです。

九月のこの時期はバカンスで、ロランは学校には留まらず、旅を楽しんでいたことが思い出されました。今、その「僧院」のなか、石段を昇り表扉を開けると、まるで私を学生の一人一人が迎えてくれるかのように、彼らの木製メールボックスが堂々と並んでいるのに瞠目しました。中庭には緑の芝生が広がり、白樺らしき樹木が真直ぐに青空に向かって立っていました。廊下を進んできますと、突き当たりの教室の大扉に、マダム宮本歓迎会会場と貼られていました。思わず私は面映ゆくなり、後ずさりしたくなったほどです。

稲畑ホールより大きな会場には、日本から送った「ユニテ」や音楽会のチラシが机上に飾られていました。まだ陽の高いパリの夕七時から九時頃まで、ジュースやワインとおつまみを手にながら、五十人ほどが家族的に集いました。日本の「ユニテ」や「ロラン作品・翻訳」の刊行物に関心を寄せられながら、半世紀も活動が続い

ていることに感嘆の眼が向けられました。

十二年前訪ねたブレーヴの純朴な村長さんご夫妻も、わざわざ駆けつけて下さり、涙を流さんばかりの親しみを示してくれました。その時にご参加のご夫妻も、当時の写真をカラーコピーしてお持ち下さったり、十二年の歳月の敷居をはらい旧交を温めました。

デルボーさん夫妻も会員なので、両親思いの息子のミシェルさんは、亡き母親役のように父親に寄り添っておられました。

関西日仏学館の館長だったムイエさんの息子さんたち、当時、小学生だったピエールとロビーが、私側のお客として来てくれました。あの頃、館長室の扉ガラスを突き抜けて、血みどろになっていた腕白ざかりだったロビーは、今やエコール・ノルマルの理科の学生に立派に成長していました。東京の国際学校へ新幹線で通い、車掌の真似をしながら駅名を全部覚えていたピエールは、サラリーマンをしているのだそうです。

会長のリエジヨワ女史は、本国フランスでロランが押しやられていることに憤慨し、なんとか若い方を教育す

ることから始めなければいけないと、その決意の程を示されていました。ソルボンヌの女性教授を私に紹介下さり、「ソルボンヌでテキストにロランの著作を使うことを具体的に検討している」ことも知らされました。

「ロラン映画」を作るという女性のプロデューサーは、「スイスでロランに出会ったという女性に会うこと、健在とはいうものの高齢なので、出来るだけ早く彼女にインタビューしながら製作を進める」と、抱負を語って下さいました。この方は、私が京都へ帰ってから、日本のロラン生誕百年祭で作った展覧会のカタログ・アルバムを送って欲しいとメールがきました。

私は、会場でお礼のご挨拶をするとき、ロマン・ロランが訴えた「戦争とファシズム反対」である平和の問題を現代に結びつけ言及いたしました。「もし、ロランがいま生きていたら」何と発言するでしょうか？

昨年のテロへの憤りは当然であるとしても、アフガニスタンの民衆や子どもたちの犠牲に目を背け、なおも「イラクへの武力攻撃」を押し進めようとしているのは、アメリカ一國帝国主義にほかなりません。アメリカの

「はじめに戦争ありき」を露呈する、人権も人道も追いやられ、巨大な悪のエネルギーである戦争を仕組んでいく国際社会に、一人でも声を出すことが大事だと思っただからです。

最後にロマン・ロランが一九二六年、九月に書いた「アメリカへの警告」を、私に代わってロビーに全文を読んでもらいました。

会長は、日本における宮本正清の役割に触れ、ことに戦時に遭遇した受難を、強調されました。フランスから見れば、日本の活動は希望の星だといわれます。

しかし、私は日本においてもロラン受容の厳しい今の状況を率直に話すことにしました。文学の低迷で読書をしなくなり、出版文化が凋落傾向にあることなど、貧しい戦後復興から便宜主義に走った日本人の心の不安も話しました。

敗戦後の荒廃のなか、ロランの普遍的精神の伝搬を、五十年間先輩たちが種子を蒔き育ててきたことを想いながら、頂いた赤い木の実と色とりどりの美しい薔薇の花束を、私はしっかりと抱きしめました。果たして、ロマ

ン・ロランのことを、人々はいつまで語り継ぎ得るでしょうか？ 継いでいって欲しいと願いながら、ロランが「バリで最も美しい」といった緑の芝生と青空に向かう樹木に目を遣る私でした。

「戦争に反対するモーパッサンの、とてもはげしい文書——この問題に関するロシアの著作の序文。——ヴィクトル・ユゴー、モーパッサン、トルストイが、戦争に反対して語っている。語るだけでは足りない。もろもろの力を結集し、必要に応じて武装した同盟を結び、平和を押しつけることが必要であろう。未来の「世界共和国」の名において、「理性」の名において、「愛」の名において、「憎しみ」とそれによって生きる者たちを、押し殺さねばならない。人は殺人者をギロチンにかける。では民衆の殺人者はなにに値するのか。——ユゴーは「戦争」の名譽を失墜させよ」と言った。——そうだ。しかしこれ以上にしよう。「戦争」を殺そう」

一八八九年六月十六日

みすず書房「ユルム街の僧院」から

ロラン二十三歳記

読書会報告

有馬通志子

三年間に亘って感動と共に読み終えました『魅せられたる魂』の次は『ジャン・クリストフ』にとの希望が多
く二〇〇一年九月二十二日から今回は始まりました。それは丁度ニューヨークで起きたあの九月十一日のテロ事件直後でもあり、平和を訴え続けたロランならこの様な事態にどう行動されるかと云う話合いから『ジャン・クリストフ』の第一回目の読書会に入りましたことが特に印象的でした。通算四〇〇回余続いて来たとおききするこの読書会の中で何度目の『ジャン・クリストフ』になるのでしょうか。

現在は中心を支えて下さる宮本エイ子さん、清原章夫さん、能田由紀子さんはじめ十二、三人前後のかた達が夏休み冬休みを除き月に一度第四土曜日の午後二時から四時迄集っております。

『魅せられたる魂』は主人公がアンネットでありましたことから三分の二は女性でしたけれど今度は逆になつたようで、学生さん、お勤めを持つかた、又若い日に『ジャン・クリストフ』に励まされた退職後のかたの色彩コピーによる絵入りの立派なレジュメ、又は手書きの美しい資料が配られます時、特に男のかた達の心の中にクリストフが如何に永く生きていたかを考えさせられます。

読書会ではクリストフの成長過程で出合う女性たち、ミンナ、ザビーネ、アーダ……特にザビーネに集まる同情的の思いが伺えたものでした。

クリストフが市立音楽堂に行く個所では清原章夫さんが持参のCDを聴かせて下さる等まだ十回目を重ねたところですが発表者のレジュメの朗読の後には、本を読むことの少なくなつた子供たちへの心配、又イラクに拳を振り上げるブッシュ政権のこと等、話題は尽きず佐々木斐夫先生が加わって下さったこともございます。若い日に良書が与えてくれる喜びは計り知れず、かつてこれ程迄に若者に感動と心の糧を蒔いたロマン・ロランに多

くのかたが親しんで頂き、そして本を手にとって下さることを願いつつ皆さんと共に読み進めて行きたいと思っております。

又、研究所のホームページをご覧頂き、初めてののかたのご参加をお待ちします。

(<http://www.zu.biglobe.ne.jp/~rolland/>)

(賛助会員)

ロマン・ロラン研究所

ホームページ改訂について

清原 章夫

ロマン・ロラン研究所のホームページ（以下HP）は、一九九九年一月一日に開設されました。同年十月に改訂してから二〇〇二年十月まで内容をほとんど変えることなく、読書会と講演会等の行事案内だけを更新するとい

う状況でした。

HPを多くの人に見ていただくには、定期的に内容を更新する必要があります。いつ見ても内容が同じだったら、繰り返し見る必要は無いわけです。当研究所には、「ユニテ」をはじめ、毎月の読書会の発表内容等、HPで公開すべき情報が多くあります。それらを、定期的に少しずつHPに掲載すれば良かったのですが、充分な対応ができませんでした。

インターネットおよびパソコン技術の進歩は目覚しく、一九九九年の開設時には他のHPと比べても当研究所HPは遜色がないと思っていましたが、三年以上過ぎると機能の面でも、情報量においても見劣りすると感じていました。

そんな時、賛助会員の志賀錬三さんが、ご友人で長野県にお住まいの、上原徳治さんを紹介してくださいました。上原さんは、志賀さんのHPをはじめ、いくつかのHPをサポートしておられ、当研究所のHPの改訂も、ボランティアとして快くお引き受けくださいました。

二〇〇二年十月より、上原さんによるHPの改訂がス

タートし、毎日HPを見るのが楽しくなるほど、日に日に良くなっていきました。また、機能面も改善していたが、以前より格段に見やすくなりました。改訂していただいたのは、全ページですが、以下に主な個所をします。

一、パソコンに表示される一行の文字数および行間を最も見やすいサイズに統一。

二、表紙ページのデザインの変更。

三、「ロランの言葉」の掲載。

四、「ユニテ」第一号から最新の三〇号までの表紙写真および内容の掲載。

五、関西日仏学館およびノーベル財団へのリンク設定。

六、宮本正清先生が作詞された母校・奈路小学校校歌の掲載。

六番目の奈路小学校校歌は、校歌が、画面下から上に向かって流れるというすばらしいページでしたが、研究所のPCは、ソフトが古いため見ることができませんでした。そこで、上原さんにご相談したところ、四台お持ちになっているPCから、最新のWindows XP

を搭載した一台を当研究所にご寄贈していただけることになりました。HPの改訂だけでもありがたいのに、PCまでいただいて本当に感謝いたします。

改訂していただいた効果は、アクセス数(当ホームページを見た人の数)の急激な増加で知ることが出来ます。一九九九年十月から二〇〇二年の八月までの二年十ヶ月で一万だったのが、改訂していただいてからわずか四ヶ月で五千を越えました。

上原さんには今後も引き続き、HPのサポートをしていただきます。特に「ユニテ」の内容を次々に掲載していただきますので、ぜひ皆さんも当研究所のHPをご覧ください。また皆様のご意見もお待ちしております。HPのURLは <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/> です。

(評議員・ホームページ作成委員)

『本は生まれる。そして、

それから』 小尾俊人著

濱田 陽

手に取った瞬間、誰もが帯に目を見張るにちがいない。

「著者は種おろしであり、出版者は苗を育てる人、書店は摘み取った種をひろく播き、古本屋と図書館は刈り入れて、整理し、保存する人である。」

この言葉の後に朱書で「そして」と続き、一呼吸で黒字に戻って、

読者によって世界の貌は変わってゆく。

と記される。印字と通念が生氣を得て拡大し、瞬きのうちに視界に飛び込んでくるようだ。

次に、本書を紐解いてみると序詞がこう吟じている。

かつて地球が生まれ、

……

そして本が生まれた。

……

こころの上下運動が始まった。

質と品位はそこで練られた。

……

対立があり矛盾があり逆説もあったが、

それらが運動を活発にした。

その過程のなかから生まれた一粒の種、

その種は、生き延びるだろうか？

世に高質の学術書・文学書を二千冊以上も送り出してきた、みず書房創業者の「出版編集論」の集大成がここに纏められている。著者からの問いかけと奥深いメッセージを受け止めてみようと、心ひそかに闘志をかきたてられる者はおそらく少なくないだろう。

氏とみず書房の出発点となったのが『ロマン・ローラン全集』であり、ローランの祖国フランスのみならず欧米

諸国の何処にも存在していない稀有の充実度を誇っている。

さて、同書を手にした者は、用紙・思想統制の戦前から出版不況の現代まで、本を舞台とする数限りないドラマに立ち会うことになる。これは、さながらロランも愛した不屈の作曲家の交響楽のようでもある。だから、本の終結部にさしかかって、著者の次の言葉に出会うとき、出版と音楽という異なった業の思想的邂逅に驚きながらも、深く納得させられるのである。

「私がこう見てきましたつくづく思いますのは、編集の原点とは、ベートーヴェンのいった有名な言葉『Nicht diese Töne』(この調子はちがう、ほかのものだ)という直覚ではないでしょうか。世界のなかに感力の高いアンテナをはりめぐらして、そこでまず、それではない、こうあるべきではないか。という思いが、まず第一であろうと思います。」

小尾俊人氏は、こうした態度で、本を生み、無数の読

者に提供しつづけてきた。さらに氏の「出版編集論」は「出版文明論」に直結している。帯と詞と。そして、それから……。この書に導かれ、本と自由の息吹を吸いつつ、新しい文明の創造に参画しようではないか。

(国際日本文化研究センター講師・評議員)

全集 ロマン・ロラン

小説 20冊
長編 1冊
短編 19冊

クレランボー

これは自由な良心を持つ一人の人間の、
競争中における、その良心の歴史を物語
る。万人のために万人に抗する烈しい熱
情と愛は、現代の魂にひしひしと迫る。

片山 誠 訳

内 面 の 旅 路 ニ 三 〇 日

みすず書房 1951年

1950年の新聞広告から

十 追 悼 十

宇佐見英治氏

研究所賛助会員・宇佐見英治氏（二九一八・一・十三—二〇〇二・九・十四）が死去されました。ロラン「コラ・ブルニョン」の訳書もあり、一九九〇年には「ロラン・片山・ヘッセ」の公開講演もございました。つつしんで故人の御冥福をお祈りいたします。

氏は友人、中村眞一郎によって、「宇佐見よ、その独特の美しい日本語によって、現代文学の財産に貴重な寄与をしてほしい」と云われたように、明澄で香り高い文体の人でありました。画家や音楽家や文学者の交遊も諸文化ジャンルの媒介の人として、人々の尊敬を集めました。

著書として「ピエールはどこにいる」（短編小説集）

「迷路の奥」「石に聴く」「雲と天人」「三つの言葉」「方円随筆」「戦中歌集 海に叫ばむ」「明るさの神秘」など。編著者として片山敏彦、ゴッホ、辻まことの作品を、訳書としてはジャコメッティ、パシュラールで知られまし

た。染織家・志村ふくみ氏との共著「一茎有情」もひろく知られております。

新宮恵美子さん

「魅せられたる魂」の自由な精神を自分の子育てに注いだ。この本は私のバイブルとおっしゃっていられた新宮恵美子さんが、二〇〇二年十月二十九日、九十四歳で逝去されました。その前年まで、ロマン・ロランセミナーにご参加下さり、特に読書会では積極的にご発言下さって若い参加者に大きな励ましを与えて下さいました。「ユニテ」二十五号では「魅せられたる魂」と私と、タイトルしてお話下さったことを編集部でまとめた記事がございます。

お二人のご冥福をつつしんでお祈りいたします。

4・20

ロマン・ロラン記念スプリングコンサート

ヴァイオリン演奏…ビエール・イワノヴィッチ

ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ

11・11

ロマン・ロランの後継者たち

蜷川 譲

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー ●講演会

公開講座

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典Ⅱ①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員Ⅱ一般賛助会員は年会費一口五千元。特別賛助会員は年会費十口以上。

二〇〇二年度 賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) *特別会員

青木やよひ 有馬通志子 蘆田ひろみ 浅井 幸
 芦田 友秀 安倍 道子 シッシェ・D・由紀子
 五島 清子 濱田 陽 福田 真人 福井 友栄
 福田万紗子 古家 和雄 本郷美智子 林 次郎
 日野三三代 北条 文子 池垣 勇 石原 和子
 *稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄) 今江 祥智
 井土 熊野 井土 真杉 伊砂 利彦 乾 昌明
 岩坪嘉能子 神谷 郁代 梶本 智美 加藤 澄子
 河合 一穂 狩野 直禎 清原 章夫 喜多 寿子
 北垣みどり 河田 厚公 岸田綱太郎 熊木 秀雄
 小牧 久時 近藤 正雄 増田ひとみ 峯村 泰光
 松居 直 宮内 幸子 村山香代子 村松 敏
 前田 和子 前田 政昭 森内富美子 森本 達雄
 中西 明朗 森本 博子 宮本エイ子 森久 光雄
 村上 光彦 松井 菊恵 西村七兵衛 西村喜代子
 西原久美子 永田 和子 能田由紀子 西成 勝好
 野村 庄吾 乗金 芳子 小尾 俊人 小田 秀子
 折田 忠温 大出 學 大川起示子 奥 和義

奥村 一彦 尾埜 善司 大谷 史朗 大谷 綾乃
 大谷佳世子 李 珮淑*佐々木斐夫
 *三友居(山本 勝) 坂谷 千歳 佐藤 弘
 佐久間由紀子 佐久間啓子 島谷 亜希
 志賀 鍊三 下郡 由 杉本千代子 鈴木 文代
 新宮恵美子 田中阿里子 田代 輝子 田間 千晶
 多田 淳子 富田 武 竹本 浩典 竹下美砂登
 谷口けいこ 長 美穂 馬木 紘子*上原 徳治
 宇佐見英治 梅原 ふさ 氏家 玲子 和田 義之
 山下 雅子 吉原 圭子 山本 信子 八木美佐子
 山下 真子 ヴァンチュール・ミシユル
 柳父 圀近

寄贈品

パソコンXP 上原 徳治
 カラリオ・コピー 宮本エイ子

あとがき

昨年の三月、パリで、一冊の本が出版されました。ベルナル・デュシャトレ著『あるがままのロマン・ロラン』の新著です。膨大な未公開資料に基づいて、豊かな情報に充ちた、待望のものであります。

また、著者のデュシャトレ氏は、ロマン・ロランの友の会（マリチヌ・リエジヨワ会長）の依頼を受けてソルボンヌ大学で話されました。新しいロマン・ロラン像に迫るものです。翻訳は、あえて若い村永京介氏に依頼し、意欲的に試みました。ここでは村上光彦先生に有益なご教示をいただき、厚く御礼申し上げます。若い翼がさらに未来に羽ばたくことを期待いたします。

村上先生は、デュシャトレ氏の本の「概要」を御紹介くださいました。全体は日本語に翻訳して、原稿用紙一五〇〇枚という相当の大きさに上るものです。いずれ翻訳され、全体が日本の読者の目に触れることが期待されますが、この「概要」でその片鱗を、また、その感触を持ちえますことは大きな喜びです。

当研究所創立者、宮本正清先生の御逝去から二〇年。これを記念し、関係の文章を二篇掲載しました。先生のお言葉に「私は若い世代が、若い情熱をかたむけて、へ自分のロランを完成し、主張することにも大きな期待をかけている」とあります。私たちの仕事も、未来に向かって大きく拡がっていることを、あらためて、力強く感じております。

昨年の公開講演をお願いいたしました蛭川譲先生は、戦後長く「ロマン・ロラン研究」誌の編集に携わり、ロランの紹介に当たって来られました。「ロマン・ロランの後継者たち」のなかで、パリ在住の椎名其二氏の知られていない側面について、貴重な知識を与えて下さいました。

椎名氏については、森有正氏もモンテーニュやアランを尊敬する椎名さんと熟知でありました。森先生はロランの先生だったガブリエル・モノー・ヘルツェンの名著『形態学』の製本を依頼され、それについて述べられたことがあります。「深い意味のこもったこの本を、今でも『もの』というものの象徴のように手にとって眺める

のである」と。

理事宮本エイ子さんは研究所の裏山の半鐘山開発計画の件について、これまで報告されてきましたが、世界的な環境問題の一環として、パリのユネスコに直接、要請のためパリに赴かれました。「ル・モンド」紙の関心をひき（京都の景観の危機、半鐘山開発について「京都よ！お前もか！」の論調）、特集記事として掲載されました。関係の皆様のご助力に感謝し、なお、今後とも御後援いただきたいと思います。またフランスの「ロマン・ローラの友の会」の近況についても、詳しいご報告をいただきます。

理事小尾俊人氏は「本は生まれる。そして、それから」を今年一月出版されました。同書を手にしてはじめて「本とはこういうものだ」という強いメッセージが伝わってまいります。本文をコピーするのは済まされないページをめくる喜びが生まれてまいります。世間はそれを出版文化へのオマージュとして注目しました。日本国際文化研究センター・講師の濱田氏が同誌上でご紹介いたしました。小尾氏は敗戦の年にロマン・ロラン全集でみす

ず書房を立ち上げ、日本でのロランの作品を広く世に問いつけてきたのであります。

今号三十号を機として編集部スタッフを大幅に強化いたしました。同時にこの誌上「ユニテ」ばかりでなく、清原さんがご紹介しているように上原徳治さんのご協力を得てサイト上でも日々ご覧いただけるようになりました。

本年も、充実した計画で、大いに活動したいと願っておりますので、皆様の御提案や御寄稿など、切にお待ちいたしております。

(編集部)

小尾 俊人	野村 庄吾
西村七兵衛	宮本エイ子
濱田 陽	能田由紀子
中西 明朗	村永 京介

ユニテ

第三十号

発行日

二〇〇三年四月二〇日

発行者

(財)

ロマン・ロラン研究所
理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所

(株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>

E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp